青年讀物に関する調査 其九輯

666
102
666-102
1200501573901

昭和九年一月

推薦圖書目錄

附「青年讀物に關する調査」

——第九輯——

大日本聯合青年團調査部

序

青年讀物に關する調査（本輯以降推薦圖書目錄と改む）は昭和三年六月に第一輯を刊行し昨年七月既に第八輯を刊行し、本團及日本青年館關係の各方面並に一般希望者に頒布して來たが毎回非常の好反響で迎へられてゐる。

今回の推薦圖書は、昭和八年六月から十一月までの間に於いて出版され又は增訂版として發賣されつゝあるものから推薦圖書として適したと思はれるものを、左記推薦圖書委員諸氏及び本團の常任理事田澤義鋪、福島繁三、主事松原一彦以下關係者七名が、十一月二十九日帝國圖書館長室に於いて嚴選したものである。

帝國圖書館長　松本喜一氏
前東京市日比谷圖書館館頭　今澤慈海氏
早稻田大學圖書館長　林癸未夫氏
東京帝國大學圖書館司書官　小野源藏氏
文部省社會教育局青年教育課長　小尾範治氏
帝國圖書館司書　岡田溫氏

發行所寄贈本

出版の洪水を以て評されてゐる折柄、この「推薦圖書目錄」を上梓して全國青年讀書界に於ける一つの最も信頼すべき燈明臺としたるは誠に有意義の事と信ずる。廣く青年團並に青年教育關係方面に於いて利用せられんことを切望する。

尚附錄「青年讀物に關する調査」は本團昭和五年度基本調査の結果に依るものであるが、青年の讀書傾向を知る上に何らかの參考資料ともなればと考へ、玆に採錄した次第である。

昭和九年一月

大日本聯合青年團調査部

推薦圖書目錄

附「青年讀物に關する調査」

推薦圖書目錄

目次

一、推薦圖書目錄……一
二、青年讀物に關する調査……二五

666/102.

修養・處生

日本精神に關する一考察　文學博士　紀平正美著　章華社　一、六〇

本書は元來日本精神會でなされた講演であるが、時勢に鑑みて上梓されたものである。内容は幾多感激すべき例話を現實の問題にとり、著者の日本精神に關する體驗觀を主としたもので、之を以て動搖せる目下の思想界の善導に資せんとするものである。

日本精神の闡明　池岡直孝著　章華社　一、二〇

著者は明治維新以後我國人が餘りにも西洋心醉に墮したのを嘆じて、我國の國體、文化、政治、經濟、教育、思想上の諸問題を日本精神と關連せしめて考察し、日本精神の闡明に力めて居る。

日本精神讀本　伊藤千眞三編　東洋書院　一、五〇

本書は元來中等學校高學年の補助讀本として編纂せられたもので、古事記、日本書紀等の我國最古の文獻から始め、徳川末期までの學者、武人等の著述や言葉の中から、日本精神を最もよく表明したもの三十餘りを選び出してその意義を正したものである。

人格の生活と現代の社會　文學博士　吉田靜致著　青年教育普及會　一、五〇

著者の倫理學上の立場は「一卽多」、「特殊卽普遍」主義で、これを簡單に云へば「此の混沌たる人生の種々相は、要するに特殊化された普遍であり、特殊の姿に於て現れた普遍である」のである。本書はこの立場から現代社會に於ける誤れる主義や思想に對して劃切なる批評を下したものである。取扱つてゐる事柄は高級であるが、それを出來るだけ容易に叙べてある。

哲學の話　大島正德著　寶文館　一、二〇

著者が東京中央放送局から「家庭大學講座」として放送されたものを出版したもので、難解の言葉は出來るだけ避け、多くの人々に讀ませる爲に書かれた哲學入門書である。

宗教再建　土田杏村著　大雄閣　一、〇〇

本書の内容は必ずしも宗教論文に限られて居ない。藝術上の隨想、著者の人生記錄、思想問題、社會問題に關する諸論文も含められてあるが、著者は此等人生上の諸問題を通して其處に一貫した宗教的感銘を表現しようとしてゐる。

人生を語る　下村虎六郎著　泰文館　一、〇〇

著者は本書に序して「本稿は中等程度の教養ある人々に、一通り系統立つた人生論を提供して、人生に關

する考察の手がかりを與へ、且つそれ等の人々の實踐上の參考にも資したいと思つて筆を執つたのであります」と述べてゐる。そして青年と主人との對話體の形式で「宇宙力を語る」「生命を語る」「人間性を語る」「人間苦を語る」「自我を語る」「人間感情を語る」「生活態度を語る」の七項に分つて、人生に最も本質的な生命論を中心として語つてゐる。本書の如きまことに人生の好侶伴と謂ふべきである。

大詔を拜して（非常時青年叢書第一輯）　日本青年館　一〇

昭和八年三月二十七日、此の日に我日本は東洋平和確立のために斷乎たる決意を以て國際聯盟を離脫したのであつたが、同じ日に、畏くも　大詔が渙發せられて我等國民の嚮ふ所を垂示させ給ふたのである。本書はこの大詔を拜して非常時に處するため、青年諸君に呼びかけられた次の三つの論文を以てその内容とする。

全國の青年に告ぐ　後藤文夫
青年は如何に進むべきか　鳩山一郎
非常時局と青年の覺悟　荒木貞夫

農村更生と青年教育（農村更生叢書第一一）　田澤義鋪著　日本評論社　五〇

今次の國民更生運動に、著者は二つの重要な發見をして居られる。その一つは社會が部落の社會的意義の重要さを認めざるを得なくなつたことと、も一つはこの更生運動に青年の重要さが認識されたことである。この二つの發見を基礎として述べられた本書は、農村更生に際して青年諸君の自覺を促すと共に、今後の農村青年の向ふ所を敎ふるものである。

若き人々へ　山崎延吉著　泰文館　一、五〇

いつも若い者への味方である山崎翁が、今年華甲の齡を迎へられたのを記念に、六十年の體驗を語つて、波瀾の多い人生行路に旅立つ若い人達に指針を與へようとせられたのが本書である。前著「世に立つ道」の姉妹篇とも見られ一〇八篇の小文から成つてゐる。

愛國勤勞讀本（私の體驗を語る）　神野信一著　春秋社　、八〇

著者は石川島造船所の職工で、生え抜きの勞働者である。本書はその燃ゆるが如き愛國の熱情と、勞働者としての尊い體驗とに依つて生れ出でたもので、この非常時局に際して勤勞階級（著者は斯う云ふ文字を使つてゐる）の世に處すべき道を神國日本主義に求め、力强く皇國の勞働者の存在意義を語つてゐる。

青年團の經營（農村の部）　熊谷辰治郎著　日本青年館　、五〇

青年團の經營は團員各自の創造的精神を基調とすべきは勿論であるが、それにもまして指導的地位に立つ人々の理解なしでは健全な發展は期し難い。この意味で多年青年團經營の爲努力し來つた著者が、その蘊蓄を傾けて經營の具體的方法、精神を本書に於て公示されてゐる。

青年團物語　山本瀧之助著　山本高三　、五〇

其の生涯を、創始期の我國青年團運動に捧げられた故山本瀧之助先生の遺稿で、先に出版された先生の全集にも之は收められてゐない。本書は明治十九年十四歳にして小學校を卒業されてより大正初期に至る二十七八年間を、先生の日記を中心に、主として青年團運動に關する記事を年代順に綴られたもので、我國に於ける青年團の發達史であると共に、旁々先生の自序傳とも見られる。本は四六判僅か百三十數頁の小冊子ではあるが、青年團關係の資料として貴重なものである。

論語私感　武者小路實篤著　岩波書店　一、三〇

世に論語學者は甚だ多い。だが本當に孔子の言葉を解する人は案外少いのではあるまいか。そして本書の著者はこの少い人の中の一人と思はれる。本書では論語の一つ一つの字句の解譯は試みてない。讀み方や字句の解釋は主として簡野道明先生に從つてゐる。唯本書で特徴とする所は論語に對する著者一流の讀後感である。孔子の言葉に對する批判や、夫を現代に引き延しての著者の感想である。程度は稍々高い。

內觀外望　農學博士　社會學博士　新渡戸稻造著　實業之日本社　一、五〇

内容は主として思想問題、政治問題、社會問題、教育問題等に關する批判で、國際人としての著者の廣い識見が縱橫に現はれてゐる。

國家・兵事・社會・法政・經濟

皇國の軍人精神

陸軍大將　荒木貞夫著　朝風社　一、四〇

今日の非常時局に直面して、皇國の軍人精神の眞髓を國民一般に認識せしめんが爲に特に荒木陸軍大臣の執筆されたもので、内容は左の十章に分たれてゐる。(一)建國の精神と皇軍、(二)軍人に賜りたる勅諭、(三)軍人精神の眞髓、(四)軍人精神と國民道德、(五)軍人精神の涵養、(六)時代の推移と軍人精神、(七)軍務を奉じての軍人、(八)社會に仕へての軍人、(九)軍備は擧國之を負ふて立つ、(十)軍人精神高揚の秋。

戰雲動く太平洋

海軍少佐　石丸藤太著　春秋社　一、八〇

太平洋を中心に、日米和戰の問題は相當やかましく、之を豫想した日米海戰記なども相當出版されてゐるが、之等は何れも小說に類するものに過ぎない。本書はこのやかましい太平洋を中心にした日米問題を、主として軍備の上より解說して、國民一般に非常時日本の眞相を明らかにしようとしたものである。記述は讀み物風で面白い。

科學戰爭

小山勝清著　實業之日本社　一、三〇

歐洲大戰以來科學的兵器の進歩に驚く可きものあることは想像に難くない。本書は本來小說家である著者が、豊富な想像力と巧みな描寫法とを以て、今後の科學戰が如何にして展開され、科學的兵器がいかに戰場に活躍するかを書いたものである。

防空讀本

國防教育研究會編　東京教材出版社　一、三〇

今日防空と云ふことがどれだけ重要な問題となつてゐるかは今更述べる迄もない。本書では空襲の意味と、之に對する防空の方法及び心得を國民一般に教へようとするもので、從つて記述も極めて平易で、量の割合に價格も低廉である。

少年航空兵とは

山田新吾著　厚生閣　一、二〇

時代は「我は海の子」から「我は空の子」に移らうとしてゐる。それ程航空機の發達は近年まことに目覺しい。本書では「立派な空軍を作る爲には是非共少年から」と云ふ意味で、我國の少年航空兵の志願からその養成についての實情を敎ふると共に、空軍の重要性と併せて少年航空兵の使命の重大なることを述べてゐる。

兵營の異聞と秘話　陸軍省新聞班つはもの編輯部編　新知社(發賣)　一、三五

兵營に於ける軍隊教育が、我々の日常生活に比して嚴肅であることは當り前である。だがこの嚴肅な軍隊生活には社會の日常生活に於ては到底得られない美德や教訓や、そして時に珍談異聞が秘められ、まことに朗らかである。本書はこの兵營生活を輕快な筆致で物語風に書かれたもので、小學校だけを終へた青少年にも樂に通讀が出來て且甚だ面白い。

日本國勢圖會　昭和八年版　矢野恒太　白崎享一編　日本評論社　一、〇〇

日本の國勢を、例へば領土、生活資料、貿易、農業、棉花、生糸、林業、畜産、鐵、石炭、電氣事業、人口政策、鐵道、海運、商業、金融、思想、政治、財政、國防、教育等々七十三の項目に分つて、統計を主體として說明したもの。日本の各方面に於ける現狀を示すものとして簡にして要を得たものである。

ナチス　長守善著　日本評論社　一、二〇

現今世界の關心の中心である獨逸のヒツトラーを中心とするナチス(獨逸國民社會黨)の思想や政策やその運動を學問的に研究したものである。

趣味の法律　續篇　上田保著　文啓社　二、八〇

新聞の知識　平野岑一著　大阪毎日新聞社　一、三〇

本書は既に昭和五年十一月に初版が出版され、今回のは再版であるが、三年間の間に新聞界にも著しい進展が示されたので本書の內容にも初版に比して再版にはかなりの增補がある。內容は一口に云へば新聞の意義と記事を拾つてから之を原稿にし、印刷にして賣り出す迄の新聞社の機能を簡單に說明したもので、近代人の常識としてこれ位の知識は必要である。尙著者は大毎の記者である。

經濟座談　平井泰太郎著　千倉書房　一、五〇

別に一貫して經濟理論を說いたり、特定の經濟問題に關して論議を闘はすものでもない。謂はば經濟隨筆で、著者が新聞や雜誌に書いたものを集めたものである。だが讀み物としては仲々面白く、面白いばかりではなく、知識的にも、又知識以外にも獵る所は仲々多い。

新經濟語辭典　大阪毎日新聞社經濟部編　一元社　一、五〇

卷頭の凡例に依れば、昭和八年八月上旬までに起つた經濟上の事象は之を收錄したとあつて、相當新らしいものである。解說は極めて平明で、新聞語辭典としても相當役立つものと思はれる。

歷史・傳記

少年國史物語　前田晁著　早稻田大學出版部　各二、五〇

「國史は國の鏡である」著者は序文に斯う云つて居る。國史を十分に咀嚼して我ものとする事が出來れば、日本精神は自らそこに湧き出でて來る。本書は既に第一卷として「神代・大和・奈良・平安時代」、第二卷として「平安時代後期・鎌倉時代」が出刊されたのみであるが、「鎌倉時代後期・吉野時代」、「室町・安土・桃山時代」、「江戸時代」、「東京時代」と續刊される筈である。全部揃へれば相當高價にはなるが、まことに美しい平易な、然も國史による日本精神の植えつけと云ふ事に相當成功してゐる好著である。

福澤先生傳（偉人傳全集第九）　高橋誠一郎著　改造社　、五〇

慶應義塾の創設者であり、明治初年の文明開化運動の大立物である福澤諭吉先生の傳記である。著者は慶應義塾で育ち、親しく先生の薫陶を受けた人で、先生の傳記作者としては申分はない。本書は讀み物として通俗的には書かれてないが、先生の思想及び當時の日本の世情がよく書き現はされてゐる。

野口英世　奥村鶴吉編　岩波書店　一、八〇

我が國の生んだ世界的科學者野口英世博士について今更說明は不必要であらう。本書は東北の一寒村に貧しく生れた博士が、世界の野口として逝去せらるる迄の苦闘の人生記錄で、非常に精確な資料に依り、ありのままの生活が忌憚なく叙述され、從つて人間野口が遺憾なく示されてある。

機械の父ワット正傳　サミール・スマイル著　伊澤梅吉譯　日本海事學會　一、五〇

ジエームス・ワットと云へば我々の耳には小學校時代から親しみのある名である。だがワットと云へば我國人には蒸氣機關の發明家の如くに傳へられてゐるが、正しく云へば當時は既に蒸氣機關は發明されて居て、ワットは唯之が劃期的な大改良を加へたのである。本書ではこの點が明確にせられ、相當手廣く事業を行つてゐた工業家を父とするワットが、苦心の結果當時發明されて間もない蒸氣機關を改良し、更に事業としてこの改良蒸氣機關の製作に從事したエンヂニヤー・ワットの奮闘努力のさまがよく盡されてある。但し所々に專門的な機械の說明があるが、讀む上には大した問題ではない。

日本現代の發明家物語　寺島柾史著　文教書院　一、五〇

少年發明叢書の第一編として出版されたもので、本書では主として世に隱れた發明家について語られてゐる。例へば少年野球用軟球とか罐詰、醬油、人造竹皮等の我々の日常に關係深い通俗なものから、軌條（レール）探傷機、ウルトラジン、NE式寫眞電送、ヴイタミンA等相當專門的な發明に至る迄、二十三種の發明品について、その發明家の苦心のさまを少年向きに述べたものである。

抜群の人々　都倉瓊山著　實業之日本社　一、二〇

本書は所謂成功者、卽ち功成り名遂げて名聲或は巨萬の富を獲ち得た人々を扱つてはゐない。本書で語らう

とする所は、自らの境遇に善處し、強い信念と努力とを以て邁進することの如何に尊いかと云ふ所である。で、こゝでは世にもすぐれた信念の人、努力の人十二人の傳記が集められてある。就中「一身を農業の發展に捧ぐる農村の父」山崎延吉氏、「生きながら神に祀られた人」松本源祐氏の傳記は何人の心をも鞭うたずにはをかない。

地誌・紀行

歐米大陸遊記　鶴見祐輔著　大日本雄辯會講談社　二、〇〇

普通一般のあわただしい歐米紀行と異り、本書には何處となく悠々たるものがあつて讀んでまことに面白い。風景風俗の描寫と云ふよりは主として歐米各國民の國民性を比較し、その文明を批評したものである。米大陸では北米合衆國が、歐洲では佛、獨、露、瑞西、伊、英等が載せられてある。

南米繪の旅　矢崎千代二著　實業之日本社　一、五〇

著者は畵家で、二十年來海外の生活を送つて來た人である。本書は主としてブラジルの移民事情を書いたもので、内容は「ブラジル繪行脚」、「コーヒーの香を嗅ぐ」、「アマゾンの大自然を往く」の三部に分たれ、彼地に於ける我が移民の職業、生活、活動事情が詳細に述べられてある。

峰・峠・氷河　藤木九三譯　朋文堂　二、五〇

内容は英、佛、獨、墺、伊、瑞、米などの諸國の著名な登山家、文學者、科學者、哲學者などの山に關する文章を、美しく日本語に譯したもので、全部で五十篇ある。中には登山記もあれば、美しい自然を稱へた言葉もあれば、又山岳に關する科學的の觀察もある。之に又數葉の山岳名畵も挿入せられ、まことに高尚な美しい本である。

文學・藝術

海豹の如く　賀川豊彦著　大日本雄辯會講談社　一、三〇

新しい詩の解釋とつくり方　百田宗治著　厚生閣　一、八〇

これは昭和四年に出版されたものの再版で、初版に比して多少の增補がある。先づ「詩とは何ぞや」「詩の構成」等の章で、詩そのものの解釋をなし、それから「はじめて詩をつくる人に」と題して詩の形式や言葉や鑑賞や推敲に關して入門的手引きをなしてゐる。簡單であるが手頃なものである。

或日の微笑　荻原井泉水著　四條書房　一、六〇

井泉水の俳句は俳らぬと云ふ人は多いが、その文章に對しては誰しも感心する。しんみりとして誠に美事である。本書は全部で七十幾つかの小品を集めたもので、何れも俳人らしい題材のみを選んで居る。本書の書名「或日の微笑」も本文中の一題名を選び出して全體の書名としたものである。

草の葉は歌ふ 感想集　吉田絃二郎著　改造社　一、九〇

東雲は瞬く　賀川豐彦著　實業之日本社　一、五〇

鉛と血　櫻井忠溫著　河出書房　一、八〇

著者がこゝに云ふ鉛と血とは、要するに彈丸か魂かであり、機械の戰爭か肉體の戰爭かである。そして著者は本書で、戰はやはり血であり魂であることを我々に見せようとしてゐる。こゝに收められた二十五の短篇は、小說もあり事實談もあり、日露戰爭もありシベリヤ出兵もある。が何れにしても戰爭には魂、魂こそ第一の武器であることを示さうとしてゐる。

日本合戰譚　菊池寬著　中央公論社　一、五〇

添削と批評 俳句になるまで 續篇　伊東月草著　交蘭社　一、二〇

微風の前　吉田絃二郎著　新潮社　一、八〇

七つの短篇と、一つの戲曲とから成つてゐる。何れも二三十頁のものであるが、最後の戲曲「金釦の兵隊」（三幕）だけは七十頁餘の中篇である。

はきちがへ　下村海南著　四條書房　一、八〇

內容は全くの隨筆風のもので、人物論あり身邊雜記あり、記行文ありスポーツ談あり、時局論もあれば文藝上の短文もある。

實例指導 趣味の寫眞術初步　松山思水著　金星堂　一、九〇

寫眞術のすべての問題に、一通りは觸れてゐるまことに便利な本で、アマチュアの初心者を對手にした寫眞術の入門書である。然も本書では專門語は成る可く避け、餘り高級品を材料にしないで平易懇切に叙べられてあるので一層アマチュアには親しみ易い。

畫集をかねた 新洋畫の描き方　藤島武二著　資文堂　一、八〇

本書一册の中に水彩畫と油繪と兩方含められ、光づ用具の選定から使用法、スケッチやデッサンの描き方、色の用ひ方等を要領よく說明されてある。插繪として主として現代作家の作品の寫眞が挿入されてある。

木彫作程　木村五郎著　金星堂　一、七〇

本書は彫刻初入門者又は素人彫刻家のためにものされたもので、木材、用具の選定から彫刻の方法、原型の作り方、接合劑、色の付け方等一通りを解說したもの。

體育・衞生

體育と指導　宮田覺造著　永田重隆著　三友社　二、五〇

全然體育指導家向きのもので、體育の目的、體育の施設と方法、體育の教材、體育の指導等の諸編に分たれてゐる。

スピード水泳術　ダニエルス著　東京帝大水泳部譯　三笠書房　一、八〇

原著者が外國人であるので、勿論本書は洋式水泳術を教ふるもので、殊に近頃非常に隆盛になつたクロール水泳術に關して說く所が多い。

應急手當法　醫學博士　萩原良一郎　醫學博士　柿坂茂著　東明堂　一、五〇

突發的の病氣や不時の怪我は、事柄が急であるだけに甚だ我々はその處置に迷ひ、徒に周章狼狽するものであるが、本書では之に對する應急手當法を、種々症狀を分つて、簡單ながら要を得た記載法で說明してある。座右に置いて便利であると共に、相當役立つものである。

病弱者の體質改造論　醫學博士　小田部莊三郎著　實業之日本社　一、五〇

本書は既に發した病氣に對する療法を教ふるものではなく、もつと積極的に病氣を起さないように體質を改造する方法を教ふるもので、その書き振りが仲々面白く、一氣に讀了出來て得る所も誠に多い。

科學（理學・工學）

趣味の科學なるほど　松島種美著　尙賢堂　二、五〇

通俗科學解說書である。題の設け方が例へば「なぜ氷に鹽を加へると更に冷くなるか」とか「露はなぜ丸くなるか」とかすべて質問體になり、之に一々納得の行くような說明が加へられてある。設けられた題目は約一五〇題あり、何れも我々が日常遭遇する不審な問題ばかりである。

虫の社會生活　理學博士　松村松年著　東京堂　一、八〇

本書は群居性を有する蟲の中で、最も高級な社會生活をなすものとして蜂と蟻について、その生活のさまを事細かに觀察し記述されたものである。記述は平易で挿繪は豊かで、本書を讀んで後改めて庭前や朽木に孜々と働く蟻や蜂の動作を眺めると、誠に親しみ深く此等の蟲の行動の意味が窺はれる。自然觀察の一つの方法を教ふるものとしてまことによい。

野鳥の生活　竹野家立著　大畑書店　一、七〇

野鳥として本書では、あかはら、くろつぐみ、とらつぐみ、うぐひす、おほるり、きじばと、ばん、きじ、やまどり等をあげて、その自然の繁殖の狀態から習性を記述して、最後に其等野鳥の飼養法、繁殖法に迄研究を及ぼしてゐる。實驗を主としてゐるだけに、得る所が多い。

現代工業常識　津田信良等著　文光社　三、八〇

少し高價であるが工業常識を教ふるものとして誠によい。記述も平易で分りよい。内容は次の十七章で、工業のあらゆる項目が含まれてゐる。

總論、工業用主要材料、原動機、機械製作、發電及び送電、電燈・電熱・無線電話、交通機關、土木、建築、化學工業、窯業、繊維工業、製紙と印刷、飲食物製造、工業の保護、工業法規。

高級ラヂオの製作と原理　原田三夫著　誠文堂　一、八〇

本書で扱はれてゐる高級ラヂオは主としてエリミネーター式四球及びペントード三球で、普通家庭用としては稍々高級であるが、近頃のラヂオの普及は決してラヂオ・ファンをして礦石式や電池式の域に滿足せしめないので、この事情にかんがみ本書を一冊加へることとした。

産業（農・工・水産・商業）

農村問題叢書　大日本聯合青年團編

第六輯　**農村人口問題**　日本青年館發行　一〇

第七輯　**農村保健衛生問題**　戸田貞三著　一〇

南崎雄七著　二〇

我が農村の進路　谷本龜次郎著　明文堂　一、三五

目下の我が國農村の行詰りを如何にして打開したものであらうか。これは國を擧げての問題である。著者はこの農村疲弊の原因を先づ究めて、之が對策としての自力更生の路を、農民の自覺に、農村經濟の建直しに、農村經營の革新に、農村生活の改善に、その他數個の項目に見出して之を説き、三重縣矢持村の自力更生基礎案その他三重、奈良兩縣下に亘つて二十一の實例を示して、自力更生の路を説いてゐる。

難關突破の新生活　町村篇（國民更生叢書第五編）　中央敎化團體聯合會編　同　會　一、三〇

難關突破の更生實話を、北は北海道から南は鹿兒島までの二十町村に就いて試みたもの。

農村を更生する人々　續篇　農業學校長協會　編　農業學校圖書刊行會　一、六〇

新興の農村　「日本のデンマークを語る」と云ふ副題目が附せられ、愛知縣碧海郡を紹介したもの。　江坂佐太郎著　泰文館　一、五〇

農漁村經濟更生と副業　永松陽一著　帝國地方行政學會　一、六五

農産製造の原理と實際（農村更生叢書第一五）　高橋偵造　坂口謹一郎著　日本評論社　一、五〇

內容は精穀・粗穀及び碎穀製造、製粉及び粉類の加工、澱粉製造、甘味料製造、豆類の加工、酒精飲料製造、調味料製造、園藝作物の加工、工藝作物の加工、嗜好料製造、畜產物の加工等に分たれてゐる。

特許を得たる農産物製造法　菊地久一郎編　日本農產加工研究會　三、五〇

本書は明治十八年から昭和八年六月迄に於ける農產物製造法に就いて特許を與へられたものの製造要領及明細書を特許公報より拔き書きしたもので、決して樂に讀める面白いものではないが、その方面に關心を有つ人々には相當役に立ち、又必要なものと思ふ。

農村更生農產物廉賣場の經營　中谷藤太郎著　實業補習敎育研究會　一、三〇

最新實用果實類の罐詰と壜詰　菊地久一郎著　實業補習敎育研究會　一、五〇

農家更生多收益肥料　森崎順三著　嵩山房　一、八〇

本書の內容の主たる部分は、肥料の各論と肥料の施用論とである。前者では人糞尿、廐肥その他の單純な自然肥料から複雜な化學肥料に至る七十種類の肥料の成分並に使用法の說明であり、後者は穀物蔬菜果樹七十數種についての實際の施肥の方法及その實驗談である。

豫防驅除花卉の害虫　駒村作次郎著　博文館　一、六〇

普通我々が栽培する花卉につく害蟲約百五十種をとりあげて、その加害狀況、形態、習性等を記し、併せ

て之が驅除法を述べたもので大變便利である。

栗の栽培法 田中諭一郎著 明文堂 二、〇〇

栗の來歴、種類、品種等から說き起して、その栽培法を相當專門的立場から說明したもので、その貯藏法販賣法、之が利用法(例へば料理法、製菓法等)に迄及んでゐる。

趣味の盆栽仕立方 吉村巖著 明文堂 一、八〇

多産鷄の飼ひ方 古谷春吉著 板倉良吉 一、二〇

養鷄飼料新知識 鈴木幸三著 明文堂 一、八〇

養豚講話 成松靜雄著 小安農園 一、二〇

家庭副業 養蜂の實際 北原利男著 厚生閣 一、八〇

趣味と副業 新しい竹細工 森田久著 博文館 一、五〇

實地應用 養魚の研究(鮎) 阿部圭葉 大日本水産會 三、〇〇

この前篇「鯉鮒鰻篇」は既に前輯に揭げ、本書はその續篇で內容は鮎だけであるが、凡そ鮎に關することは隨分事細かに述べられてある。鮎の養殖法は勿論、販賣法、料理法、加工法に關しても餘す所ない。

日本農業年鑑 昭和九年 富民協會編 同會 一、〇〇

昭和八年中の出來事を基礎として編纂せられた農業年鑑で、毎年刊行せられてゐる。最初に「記事」として約二五〇頁程主として今年中に起つた農村問題の主要題目について名士の解說があり、次に又約二五〇頁程農業の各方面に關する統計が揭げられてある。

年六回轉目標 小賣店經營法 清水正巳著 誠文堂 一、八〇

小賣店の經營法をイロハから手引きしたもので、年六回轉とは、大衆向商店ではストツクを年に六回轉せしめることを目標とせよとの意である。章を二十七に分ち、開店する都市や場所の選擇から品物の仕入、店員の傭入れ方、開店賣出し、定價票のつけ方、ショウウインドウの陳列法等々、細大漏らさず說明され

てある。

能率百話　上野陽一著　千倉書房　一、五〇

商工業の經營に關して、如何にすれば最も能率的であるかといふ問題に就き、種々の方面から分り易く講じたものである。主として商工業を實際に經營してゐる人々の爲のものである。

青年讀物に關する調査

目次

はしがき……一七

一般圖書

概說……一九

一、全國的結果……一九

Ⅰ 分類別に依る觀察……二一

Ⅱ 書目別に依る觀察……三三

Ⅲ 各分類別內の書目に就て……三五

二、市部及び郡部の結果……四一

Ⅰ 都市大小別より見たる結果……四二

Ⅱ 郡部地區別より見たる結果……四三

新聞

概說……四四

一、中央新聞……四六

Ⅰ 中央新聞の購讀狀況……四八

Ⅱ 中央新聞の分布狀況……五一
二、地 方 新 聞……五四
Ⅰ 地方新聞の購讀狀況……五四
Ⅱ 地方新聞の分布狀況……五五
三、特 殊 新 聞……六一
四、都市に於ける狀況……六四
Ⅰ 都市大小別より見たる全體的結果……六五
Ⅱ 都市大小別より見たる中央新聞內部の關係……六六
講 義 錄
概 說……六八
一、全國的結果……六八
Ⅰ 分類別に依る觀察……七〇
Ⅱ 書名別に依る觀察……七三
Ⅲ 各分類別內の書目に就て……七四
Ⅳ 講義錄種別內容書目……七八

はしがき

本調査は、本團に於て昭和五年四月末日現在をもつてなされた全國單位青年團基本調査のうち讀物に關する部の集計に據つたものである。この讀物に關する調査は、圖書、講義錄、雜誌、新聞の四項目よりなり、そのうち雜誌に就ては既に「青年讀物に關する調査」第八輯に「青年團では如何なる雜誌が讀まれてゐるか」の題下にその大要を報告し、こゝには圖書、講義錄、新聞に就て全國的傾向を報告するものである。

本調査の範圍は三府四三縣それに北海道、樺太に亘る全國的調査にして、この調査報告團數は一三、六八八團(市部一、七七一團、郡部一一、九一七團)にて全國總團數の八割以上に及び、調査の單位は總て町村及び町村內に於て獨立經營せる一單位青年團をもつてした。而して、讀物に就ての調査事項は、その團に於て「團員の主として讀んでゐるもの」に就て報告を得たものであつて、團員個人に於ての調査ではないことを斷つて置く。こゝでは單に青年團員の讀物に對する全國的傾向について述べることゝし、府縣別、其他の詳細に就いては近刊の「昭和五年度全國單位青年團基本調査報告」を參照願ひたい。又雜誌の購讀傾向に就ては前記の「青年讀物に關する調査」(第八輯)を是非

併讀されたい。

以上はこの調査の經緯を述べたにすぎないが、この調査の目的及び意義役割は何んであらうかと云ふことを、付言しておかなければならない。現代に於ては書物乃至一般讀物は、吾人の生活と離れ得ないものとなつてゐると同時に、缺くことの出來ないものであらう。然し、その讀物も年齡に應じて內容範圍に適否があつて、兩者が符節するところに、はじめて讀物は吾人の內容となり、生活力の糧となるのである。こゝに於て本調査は青年はどんなものを讀んでゐるか、又如何なる讀物を欲してゐるか、と云ふことを明らかにして、青年にどんな讀物を推奬すべきかの問題を解決しようとしたのである。即ち現代の青年の讀物傾向の事實を調査して、而してこれに適當した讀物を推薦し、青年の生活を稗益し指導しなければならない意圖である。今回の調査報告は昭和五年度に行はれたもので、材料は聊か古いが、資料の乏しいこの方面に於ては、全國青年層の讀物傾向のアウトラインを知る一助には充分なりと思ふ。

一般圖書

概說

一般圖書の集計圖數は全國七、六五七圖(市部七二六、郡部六、九三一)で、前揭調査圖數に對比すれば可なりの距離がある。圖書の報告延圖數は市部二、二四八、郡部二三、三七〇、全國二五、六一八圖に達し、決して少い數ではない。併し右のうち市部に於ては二冊以下、郡部に於ては三冊以下の報告圖數は集計の都合上凡て「其他」として書名の明示を避け、之を切捨てたので書名明記の分は全國合計僅か九、四三九にしか過ぎない。從つて書名明記の圖書の集計數字は實數とは差があり、實際はもつと多いのである。

一 全國的結果

I 分類別に依る觀察

先づ分類別に依る全國的結果は左の通りである。

666
102

先づ郡部丈けの結果と全國的な總結果とは相一致した傾向を示してゐる。處が市部は少しく形相を異にし、「修養」の代りに「文藝」が第一位を占め、「歴史地理」、「經濟産業」、「政治社會」の三者は郡部市部交々相違してゐる。而して「科學」以下は郡部市部とも何れも同樣の傾向を示してゐるのである。以上に依つて他の讀物調査に於けると同樣に、一、都市と農村との間には可なりの差異がある事、並びに二、全國的な傾向は郡部が支配してゐると云ふ事が諒解されるのである。修養がおしなべて優位を保持してゐるのは誠に心强い次第である。市部では文藝が首位を持してゐるが、修養との差はきはめて僅少である。修養に次いでは文藝がよく讀まれてゐるが、此の修養、文藝の兩者は他の分類項目とは實に格段の相違を示してゐる。（即ち兩者を合すれば、市部五七・六%、郡部六〇・〇%、全國五九・七%で、優に全體の過半を制するのである）之に比すれば他のものは遙かに劣勢にあるが、この劣勢の中に在りても、「歴史地理」、「政治社會」及び「經濟産業」の三者は割合によく讀まれてゐて、三者を合せた全國的結果は三三・二%となつてゐる。この三者間の關係は、農村では經濟産業が第一位で歴史地理を凌ぎ、逆に都市では歴史地理が第一位で政治社會がその次である。都市の第三位は經濟産業であるが、農村では政治社會である。かくして以上何れも夫々興味深い數的結果と考へられるのである。科學もの以下の少いのは淋しいが、之は本が少い事が大いに關係してゐるのであつて、必ずしも悲觀すべき結果ではない。

最後に右と同樣の關係を前述の如く書目明記の分のみに就て考察すれば左表の結果が得られる。此の數字は先きにも述べし如く、市部では二部以上、郡部では三部以上記載のもののみをとつたものであるから、實際の數よりは遙かに少い。が併し反對に讀書の傾向を示す濃度は前表の數字よりは强い。斯樣な兩者の數的意味の差を考慮に入れて彼此對照すれば、そこに種々興味ある異同を

市郡別 / 分類別	全國		市部		郡部	
	實數	%	實數	%	實數	%
修養	八、三二八	三二・五	六四四	二八・七	七、六八四	三二・九
文藝	六、九七四	二七・二	六四九	二八・九	六、三二五	二七・一
經濟産業	三、四六六	一三・五	一六八	七・五	三、二九八	一四・一
歴史地理	二、五九八	一〇・一	二九四	一三・〇	二、三〇四	九・九
政治社會	二、四五一	九・六	二五二	一一・二	二、一九九	九・四
科學	四一九	一・六	七六	三・四	三四三	一・五
體育衞生	三六三	一・五	四八	二・一	三一五	一・三
青年園	二二六	〇・九	二九	一・三	一九七	〇・八
雜	七九三	三・一	八八	三・九	七〇五	三・〇
計	二五、六一八	一〇〇	二、二四八	一〇〇	二三、三七〇	一〇〇

666
102

見ることが出來る。

市郡別 / 分類別	全國 實數	全國 %	市部 實數	市部 %	郡部 實數	郡部 %
修養	三、六四九	三八・七	三三四	三三・二	三一五	三九・三
文藝	三、六六八	三八・九	四一一	四一・〇	三、二五七	三八・六
經濟産業	五一三	五・四	四九	四・九	四六四	五・五
歷史地理	八四〇	八・九	八七	八・六	七五三	八・九
政治社會	四四八	四・七	七二	七・一	三七六	四・五
科學	二一	〇・二	一五	一・五	六	〇・一
體育衛生	三四	〇・四	一三	一・三	二一	〇・二
青年圖	三九	〇・四	七	〇・七	三二	〇・四
雜	二二七	二・四	一七	一・七	二一〇	二・五
計	九、四三九	一〇〇	一、〇〇五	一〇〇	八、四三四	一〇〇

II 書目別に依る觀察

今度は右の分類別には拘泥せず、凡ての圖書のうちで、何と云ふ本が最も普及し且つ讀まれてゐるかと云へば、左表の如し。（書名明記の分のみにつき、その報告圖數の大小順に配列せるもの）

圖書名	全國	市部	郡部
一、修養全集	一、八八二	一〇三	一、七七九
二、現代日本文學全集	一、〇三七	九〇	九四七
三、講談全集	八〇三	三一	七七二
四、大衆文學全集	三五八	三七	三二一
五、英雄待望論	二七六	一二	二六四
六、世界大衆文學全集	二六一	三九	二二二
七、修養書	二五三	七八	一七五
八、肉彈	二〇一	一〇	一九一
九、體驗を語る	一八七	一四	一七三
一〇、明治大正文學全集	一八二	二〇	一六二
一一、權威	一六三	六	一五七
一二、偉人傳	一四九	三二	一一七
一三、青年と修養	一四五	一三	一三二
一四、ムツソリーニ傳	一三九	七	一三二
一五、農業書	一三六	七	一二九
一六、青年讀本	一二六	九	一一七
一七、母	一一〇	二	一〇八
一八、朝日常識講座	八一	五	七六
一九、文學書	八一	五四	二七
二〇、青年訓練教本	七五	一四	六一
二一、明治大帝	七五	一四	六一
二二、國民小訓	六九	四	六五
二三、公民讀本	五九	四	五五
二四、立志傳	五七	四	五三
二五、傳記物	五四	八	四六
二六、講談	五三	二	五一
二七、文藝讀本	五三	二二	三一
二八、實業書	五二	一〇	四二
二九、將軍乃木	五〇	—	五〇
三〇、漱石全集	四八	五	四三
三一、小說	四二	五	三七
三二、西部戰線異狀無し	四一	九	三二
三三、長編小說全集	四一	一〇	三一
三四、處世之道	四一	五	三六
三五、乃木將軍	三八	五	三三
三六、乃木大將	三七	一〇	二七
三七、赤穗浪士	三四	—	三四
三八、歡喜	三四	—	三四

三九、青年雄辯集	三四	—	三四
四〇、エヂソン傳	三三	—	三三
四一、菊池寛全集	三三	七	二六
四二、日本外史	三一	八	二三
四三、補習讀本	三一	—	三一
四四、現代大思想全集	三〇	一二	一八
四五、西郷南洲	三〇	三	二七
四六、青年團の使命	二八	八	二〇
四七、經濟學全集	二六	一一	一五
四八、思想書	二六	九	一七
四九、經濟書	二五	一五	一〇
五〇、現代法學全集	二五	七	一八
五一、昭和一新論	二五	—	二五
五二、青訓教科書	二五	二	二三
五三、自然と人生	二四	三	二一

五四、落語全集	二三	八	一五
五五、大衆文藝	二二	九	一三
五六、産業書	二二	六	一六
五七、宗教書	二二	一一	一一
五八、補習教科書	二一	—	二一
五九、實業書	二〇	—	二〇
六〇、心の力	一九	—	一九
六一、公民教科書	一九	—	一九
六二、國史美談	一九	—	一九
六三、農業經營	一八	—	一八
六四、大正青年と帝國の前途	一八	—	一八
六五、陸上競技	一七	二	一五
六六、逸話の泉	一七	—	一七
六七、日本に還れ	一七	—	一七
六八、農業讀本	一七	—	一七

備考　紙面の都合に依り購讀團數一六以下は省略せり。

修養全集が最大で、一、八八二を算し全體の一九・九%を占めてゐるのは甚だ大きな結果であらう。第二位は現代日本文學全集、第三位は講談全集で何れも文藝物である。そして第四位の大衆文學全集以下は前三者に比すれば、遙かにそのレベルが降つてゐるのである。假りに前三者のパーセンテージを合して見れば三九・四%となる。之に依つて同じ様なものが如何に多く各地方で讀まれてゐるかゞ分る。而して第十四位に始めて歴史物のムツソリーニ傳が現はれるまで、一位から十三位までは悉く修養物と文藝物とが占めてゐるのである。以てこの兩分類に屬する圖書がどれ丈け壓倒的に愛好されてゐるかゞ判明するであらう。

次に「經濟産業」に屬するものでは、「農業書」がムツソリーニ傳に繼いで第十五位に始めて現はれ、「政治社會」では第十八位の「朝日常識講座」が最初である。それから「青年訓練教本」が「雜」に屬するものとして始めて第二十位に出てくるが、青年團關係に至つては、「青年團の使命」がずつと降つてやつと第四十六位に座してゐるのである。而して「科學」、「體育衞生」に屬するものなどは、この表には載せ得られないほど遙かに下位に在るのである。

III　各分類別内の書目に就て

各分類別相互間の傾向は既にIに於て述べたのであるが、更に各分類別内部の形勢を窺つて見よう。次に掲ぐる諸表は圖書名の明記せるものに就て報告團數の大小順に從ひ配列せるものである。

先づ「修養」に關するものに就ては左の通りである。

修養に關するもの

帝圖

666
102

圖書名	全國	市部	郡部
一、修養全集	一、八八二	一〇三	一、七七九
二、英雄待望論	二七六	一二	二六四
三、修養書	二五三	七八	一七五
四、體驗を語る	一八七	一四	一七三
五、權威	一六三	六	一五七
六、青年と修養	一四五	一三	一三二
七、青年讀本	一二六	九	一一七
八、國民小訓	六九	四	六五
九、處世之道	四一	五	三六
一〇、歡喜	三四	—	三四
一一、青年雄辯集	三四	—	三四
一二、宗教書	二二	一一	一一
一三、心の力	一九	—	一九
一四、演說集	一九	二	一七
一五、逸話の泉	一七	—	一七
一六、裸一貫から	一六	二	一四
一七、日々の修養	一四	—	一四
一八、使命と人生	一三	—	一三
一九、哲學書	一二	四	八
二〇、雄辯書	一二	六	六
二一、青年修養訓	一二	二	一〇
二二、中道を歩む心	一一	—	一一
二三、新生の歩み	一一	—	一一
二四、道の國日本の完成	九	二	七
二五、立身の基礎	九	—	九
二六、田園生活の向上	九	—	九
二七、田園の青年へ	七	—	七
二八、農村青年の進路	六	三	三
二九、修養雜話	六	—	六
三〇、自己の爲に	六	—	六
三一、大道	六	—	六
三二、現代青年に告ぐ	六	—	六
三三、明治天皇御集謹解	六	—	六
三四、皇室と國民	六	—	六
三五、人格と修養	五	二	三
「修養」總數	三、六四九	三三四	三、三一五

右表に明らかなる如く修養全集は實に五一・五七%を以て全修養書の過半を占めてゐるのである。之に比すれば英雄待望論(七・五六%)以下の如きは曉天の星の如く寥々たるものである。

次は「文藝」の結果であるが、第一に目につくことは全集物の壓倒的な事である。全國總數三、六六八圍(市部四一一、郡部三、二五七)のうち全集物は二、八五四圍(市部二五四、郡部二、五九五)

文藝に關するもの

圖書名	全國	市部	郡部
一、現代日本文學全集	一、〇三七	九〇	九四七
二、講談全集	八〇三	三一	七七二
三、大衆文學全集	三五八	三七	三二一
四、世界大衆文學全集	二六一	三九	二二二
五、肉彈	二〇一	一〇	一九一
六、明治大正文學全集	一八二	二〇	一六二
七、母	一一〇	二	一〇八
八、文學書	八一	五四	二七
九、講談	五三	二	五一
一〇、文藝書	五三	二二	三一
一一、漱石全集	四八	五	四三
一二、小說	四二	五	三七
一三、西部戰線異狀無し	四一	九	三二
一四、長編小說全集	四一	一〇	三一
一五、菊池寬全集	三三	七	二六
一六、自然と人生	二四	三	二一
一七、落語全集	二三	八	一五
一八、大衆文藝	二二	九	一三
一九、娛樂書	一六	五	一一
二〇、戰記名著集	一三	—	一三
二一、死線を越へて	一二	—	一二
二二、大菩薩峠	九	二	七
二三、擊滅	九	二	七
二四、此の一戰	九	—	九
二五、銃後	七	—	七
二六、ユーモア全集	七	四	三
「文藝」總數	三、六六八	四一一	三、二五七

666
102

にして、單行本は八一四圖(市部一五二、郡部六六二)にて全集ものが七七・八%を占め單行本を遙かに凌駕してゐる。第五位の「肉彈」が單行本で、第四位までは凡て全集ものであり、その%も大きく第四位までの合計實に六七・〇三%となつてゐる。之に依つてかの圖本の大洪水が青年圖員諸君をも襲つた事が實證せらるゝ。

次は「歴史地理」であるが、殆んど傳記ものばかりなのが注目せらるゝ。全國總數八四〇圖(市部八七、郡部七五三)のうち傳記ものは七四二圖(市部六七、郡部七五)、一般歴史地理は九八圖(市部二〇、郡部七八)にして傳記ものは總數の八八・二%を占めてゐる。特にムツソリーニ傳が仲々多いのは時節柄興味ある現象である。其他のものでは明治大帝の御傳記をはじめ、乃木大將(異種

歴史地理に關するもの

圖書名	全國	市部	郡部
一、偉人傳	一四九	三二	一一七
二、ムツソリーニ傳	一三九	七	一三二
三、明治大帝	七五	一四	六一
四、立志傳	五七	四	五三
五、傳記物	五四	八	四六
六、將軍乃木	五〇	—	五〇
七、乃木將軍	三八	五	三三
八、乃木大將	三七	一〇	二七
九、赤穗浪士	三四	—	三四
一〇、エヂソン傳	三三	—	三三
一一、日本外史	三一	八	二三
一二、西郷南洲	三〇	三	二七
一三、國史美談	一九	—	一九
一四、歴史書	一六	四	一二
一五、赤穗義士傳	一五	二	一三
一六、英雄傳	一五	四	一一
一七、義士銘々傳	八	—	八
一八、二宮尊徳傳	八	二	六
一九、乃木希典	四	—	四
二〇、西郷隆盛	三	—	三
二一、赤穗四十七士	二	—	二
二二、吉田松蔭	三	—	三
「歴史地理」總數	八四〇	八七	七五三

の書をも合すればムツソリーニ傳に次ぎ第三位を占む)、赤穗義士、西郷南洲がよまれてゐる。エヂソン傳が相當よまれてゐるのはうれしい次第である。

次に掲ぐるは「政治社會」及び「經濟産業」の二表であるが、前者では朝日常識講座、公民讀本が卓れ、後者では農業書及び實業讀本の二つが優位である。全集もの、影響はこゝでも大分現はれてゐる。

政治社會に關するもの

圖書名	全國	市部	郡部
一、朝日常識講座	八一	五	七六
二、公民讀本	五九	四	五五
三、現代大思想全集	三〇	一二	一八
四、思想書	二六	九	一七
五、現代法學全集	二五	七	一八
六、昭和一新論	二五	—	二五
七、公民教科書	一九	—	一九
八、大正青年と帝國の前途	一八	—	一八

666
102

九、日本に還れ　一七　一　一七　一五
一〇、農村問題　一六　一　一六　一六
一一、理想の村　一三　一　一三　一三
一二、公民讀本　一二　一　一二　一二
一三、六法全書　一一　一　一一　一一
一四、政治社會書　九　九　一　一

經濟産業に關するもの

圖書名	全國	市部	郡部
一、農業書	一三六	七	一二九
二、實業讀本	五二	一〇	四二
三、經濟學全集	二六	一一	一五
四、經濟書	二五	一五	一〇
五、産業書	二二	六	一六
六、實業書	二〇	一	二〇
七、農業經營	一八	一	一七
八、農業讀本	一七	一	一六
九、デンマルクの農業	一六	一	一六
一〇、肥料學	一六	一	一六
一一、蔬菜栽培	一六	一	一六
一二、農村の副業	一四	一	一三
一三、畜産書	一一	一	一一
一四、農家の副業	一一	一	一一
一五、農村經營法	九	一	九
一六、農藝水産百科辭典	七	一	七
一七、農業經濟學	七	一	七
一八、肥料の施し方	七	一	七
一九、理想の農家	七	一	七
二〇、經濟産業書	六	一	六
二一、養鷄書	六	一	六
二二、蔬菜園藝全集	六	一	六
二三、果樹園藝	六	一	六
「經濟産業」總數	五一三	四九	四六四

科學、體育衛生、青年團、雜書に關するもの

圖書名	全國	市部	郡部
科學			
一、科學書	一四	一四	
二、電氣學	三	一	三
三、化學書	三	一	三
四、無線電話の話	二	二	一
「科學」總數	二二	一六	六
體育衛生			
一、陸上競技	一七	二	一五
二、體育書	一三	七	六
三、運動書	四	四	一
四、體育衛生	三	三	一
五、體育競技	二	二	一
「體育衛生」總數	三四	一三	二一
青年團			
一、青年團の使命	二八	八	二〇
二、幹部の修養	九	一	九
三、自治的青年團幹部	三	一	二
四、思想問題と青年團	二	一	一
「青年團」總數	四二	一〇	三二
雜書			
一、青年訓練教本	七五	一	七五
二、補習讀本	三一	一	三一
三、青訓教科書	二五	二	二三
四、補習教科書	二一	一	二一
五、青年訓練讀本	一一	一	一一
六、北海道青年讀本	一〇	一	一〇
七、補習學校教本	六	一	六
八、新青年訓練教本	五	一	五
九、兒童文學	五	二	三
一〇、青年訓練示本	四	一	四
「雜書」總數	一九三	四	一八九

る様である。「政治社會」の方では流石に憂國的な或は現實より一歩進んだ理想的なものが多いが、

一五、政治讀本　六　一　六　六
一六、現代の傾向と心的革命　五　一　五　五
一七、思想善導　五　二　三　四
一八、農民讀本　四　一　四　四
「政治社會」總數　四四八　七二　三七六

666
102

「經濟産業」では實際的な農業に關するものが大部分を占めてゐる。

最後に揭ぐる表は「科學」、「體育衞生」、「青年團」及び「雜書」に關するものであるが、概して數が小さいのは前述の如く夫々市部郡部に於ける省略の爲でもあるが、元來その普及率の少いことに依るものと思ふ。

二　市部及び郡部の結果

1　都市大小別より見たる結果

全國の都市一〇五を人口の多寡に依つて、一〇萬未滿(七五都市)、一〇—五〇萬(二二都市)、五〇萬以上(六都市)の三つに分類して、讀書傾向を見れば左表の如くである。

都市大小別 / 分類別	全國		五〇萬以上		一〇—五〇萬		一〇萬未滿	
	實數	%	實數	%	實數	%	實數	%
修養	六四四	二八・六	二八八	三〇・五	一五一	三〇・六	二〇五	二五・三
文藝	六四九	二八・九	二六四	二八・〇	一六〇	三二・四	二二五	二七・七
歷史地理	二九四	一三・一	一三八	一四・六	五〇	一〇・一	一〇六	一三・一
政治社會	二五二	一一・二	九一	九・七	四七	九・五	一一四	一四・〇
經濟産業	一六八	七・五	五一	五・四	三〇	六・一	八七	一〇・七
科學	七六	三・四	三四	三・六	一四	二・八	二八	三・五
體育衞生	四八	二・一	一七	一・八	一四	二・八	一七	二・一
青年團	二九	一・三	一三	一・四	八	一・六	八	一・〇
雜書	八八	三・九	四七	五・〇	二〇	四・一	二一	二・六
計	二、二四八	一〇〇	九四三	一〇〇	四九四	一〇〇	八一一	一〇〇

先づ全都市の合計では、やはり「文藝」と「修養」とが卓れ、「歷史地理」、「政治社會」も相當多いが、前二者の半ばにも達しない。「經濟産業」が比較的少數なのは一奇である。

次に都市大小別間の關係を見るに五〇萬以上の六大都市と、一〇—五〇萬の中都市との間には、あまり傾向の差はないが、一〇—五〇萬の文藝、五〇萬以上の歷史地理は比較的多い。一〇萬未滿の小都市は前二者と稍々趣きを異にし、修養より經濟産業に至るまで總て一樣に相當讀まれてゐるのが特色である。一〇—五〇萬、一〇萬未滿何れも文藝が修養を凌駕してゐるが、獨り五〇萬以上に於ては修養がリードしてゐる。又集計圖數を以て圖書報告延圖數を除せる結果、即ち讀書率は、都市全體は三・二二となつてゐるが、五〇萬以上にては三・一八、一〇—五〇萬にては三・二二、一〇萬未滿にては三・二四となり、極く僅かではあるが都市の大小に反比例して、その數を減少してゐるのである。

666
102

II　郡部地區別より見たる結果

郡部地區別より見たる大勢は大凡左表の通りになつてゐる。

分類別 / 地方區劃別	修養	文藝	歷史地理	政治社會	經濟産業	科學	體育衞生	青年團	雜書	合計
全國	七、六八四 (三二・九)	六、三三五 (二七・一)	二、三〇四 (九・九)	二、一九九 (九・四)	三、二八 (一三・九)	三四三 (一・五)	三一五 (一・三)	一九七 (〇・八)	七〇五 (三・〇)	二三、三七〇 (一〇〇)
北海道	七七四 (三八・一)	三九一 (一九・二)	一九四 (九・六)	一八八 (九・二)	二六四 (一三・〇)	三八 (一・九)	三一 (一・五)	二〇 (一・〇)	一三三 (六・五)	二、〇三三 (一〇〇)
東北區	八三三 (二六・〇)	七八一 (二六・五)	三七五 (一二・八)	三一六 (一〇・七)	四七二 (一六・〇)	四七三 (一・五)	三八 (一・三)	一七 (〇・六)	七六 (二・六)	二、九四一 (一〇〇)
關東區	一、〇一八 (三二・四)	九八九 (三一・五)	三〇三 (九・六)	二一〇 (六・七)	四二一 (一三・四)	四二 (一・三)	六〇 (二・四)	三七 (一・一)	四六 (一・五)	三、一二四 (一〇〇)
北陸區	五四二 (一九・七)	六二八 (二三・三)	二一〇 (六・六)	一七三 (五・五)	二三五 (八・九)	二九 (一・六)	二九 (一・六)	一七 (〇・六)	五七 (三・三)	一、八四〇 (一〇〇)
東山區	五三八 (二二・四)	四九〇 (二九・五)	一三三 (八・〇)	一九三 (一一・六)	二〇五 (一二・三)	二三 (一・四)	一四 (〇・九)	五 (〇・三)	六〇 (三・六)	一、六六〇 (一〇〇)
東海區	七八七 (二六・三)	五五一 (二五・四)	二二七 (一〇・五)	二〇九 (九・六)	二九〇 (一三・四)	三五 (一・六)	一三 (〇・六)	一三 (〇・六)	三五 (一・六)	二、一七〇 (一〇〇)
近畿區	九〇二 (二五・四)	六七二 (二六・三)	二一四 (八・四)	二四九 (九・八)	三三七 (一五・二)	四六 (一・八)	四五 (一・八)	一六 (〇・六)	六二 (二・四)	二、五五〇 (一〇〇)
中國區	九八六 (三一・四)	九一〇 (三〇・一)	二九二 (九・六)	三〇四 (一〇・〇)	三八一 (一二・〇)	四九 (一・六)	三三 (一・一)	三〇 (一・〇)	六六 (二・一)	三、〇四一 (一〇〇)
四國區	四〇四 (三四・一)	三〇二 (二五・五)	一一〇 (七・二)	一三二 (一一・〇)	一六九 (一四・三)	一二 (〇・九)	一四 (一・二)	一〇 (〇・七)	六一 (五・一)	一、二一二 (一〇〇)
九州區	八二五 (三二・二)	五五六 (二二・〇)	三一三 (一二・五)	一九九 (七・九)	四九七 (一九・七)	二三 (〇・九)	二一 (〇・八)	一三 (〇・五)	八九 (三・五)	二、五二六 (一〇〇)
沖繩縣	二六 (三・七)	一八 (二・四)	一三 (一・六)	八 (一・〇)	六 (七・八)	一 (一・三)	二 (二・六)	一 (一・三)	三 (三・九)	七七 (一〇〇)
樺太	六九 (三九・二)	二七 (一五・四)	一三 (七・四)	一九 (一〇・八)	二二 (一二・五)	四 (二・三)	五 (二・八)	八 (四・五)	一〇 (五・七)	一七六 (一〇〇)

備考　（　）内は百分比を示す。

「修養」は云ふまでもなく全體としてみな割合が大きいが、その中樺太の三九・二%が最大で、北海道の三八・一%、東海の三六・三%が之に次ぐ。最小は東北の二八・〇%である(郡部平均は三二・九%、前掲)。

「文藝」では北陸の三三・三%、關東の三一・五%が大きく、樺太(一五・四%)及び北海道(一九・二%)が小さい。

「經濟産業」では九州の一九・七%、東北の一六・〇%、四國の一四・三%の順序となり、沖繩を除き、他は凡て殆んど同じ樣な割合を示してゐる。(平均は一四・一%)

「歷史地理」、「政治社會」は何れも郡部平均九%臺であるが、その中前者では樺太(一五・六%)、東北(一二・八%)及び九州(一二・五%)が多く、最小の北陸も六・六%である。後者では東山の一

666
102

一・六%、四國の一一・〇%が多く、關東の六・七%を最小とする。

「科學」以下は全體の割合が一・五%以下で極めて小さいから、之と云つて、際立つた特徴は覗へないが、なほその中「科學」では樺太(二・三%)、北海道(一・九%)、「體育衞生」では樺太、沖繩多く、關東の二・四%も可なりの大きさである。最後に「青年團」では樺太、北陸が多く、「雜」では北海道の六・五%、樺太の五・七%及び四國の五・一%が大きい(郡部平均は三・〇%)。

新聞

概說

新聞に就ては、調査報告團數は市部、郡部併せて一三、六八五團にして、そのうち集計したものは市部一、三一一團、郡部一〇、四〇九團、全國合計一一、七二〇團である。而してこゝに新聞紙を報告せられた延數は實に四五、四八九と云ふ數にのぼり、これを一般常識的分類に從つて中央新聞、地方新聞、特殊新聞の三つに大別すると左の如くなる。

	中央新聞	地方新聞	特殊新聞	計
全國	二三、八六三	二〇、三四五	一、二八一	四五、四八九
市部	三、一九二	九二九	二三〇	五、三五一
郡部	二〇、六七一	一八、四一六	一、〇五一	四〇、一三八

中央新聞と地方新聞との區別に就ては一般に二つの觀點が考へられる。一つは讀者の地域的範圍より見たるもので、その全國的なるを中央新聞とし、然らざるものを地方新聞とする。他の一つは帝都即ち東京に於て發行せらるるものを前者とし、然らざるものを後者とする見解である。處が我國の普通の常識は右の何れとも一致してゐない、本調査に於ては全然この常識的分類に從ひ、中央新聞として選擇せるは左の十三紙即ち東京日日、東京朝日、大阪毎日、大阪朝日の四紙、それから東京の報知、國民、時事、讀賣、中外商業、都、毎夕、萬朝及び大阪の時事、之である。この外極めて僅かなものに、東京のやまと、二六、東京毎日及び中央の四紙、大阪の大阪日々、大阪毎夕、大阪今日、及び夕刊大阪の四紙がある。

右以外の新聞紙は凡て地方新聞として取扱つたが、その種類は全國で一三六紙を數へる。(新聞紙の種類に就ては中央新聞、地方新聞、共に紙數の少ないものは「其他」として紙名を省略せるものがある爲、實際の新聞紙數は右より幾分多いわけである)。更に特殊新聞とは以上の如き一般新聞とは異り、日本青年新聞を始め、禁酒新聞、人類愛善新聞等々、或る特定の讀者を對象とせるものか又は或る特定の主張を有する新聞紙のことにして、この特殊新聞が全部で一九一紙を算し、以上本調

666
102

査に於て取扱へる新聞紙の種類は合計三四八紙となる。時事年鑑に依れば昭和五年末の全國日刊(有保證金)新聞紙總數は一、〇三一紙となつてゐるから、全國青年團に於て讀まれる新聞紙の種類は割合に少いと考へられる。

一　中央新聞

1　中央新聞の購讀狀況

そこで各新聞が一體どんな割合で讀まれてゐるであらうか、先づ中央新聞より順次見るに左表の通りである。

新聞紙名	全國		市部		郡部	
	實數	%	實數	%	實數	%
大阪毎日	五、五六六	二三・三	七五八	一・九	四、八〇八	二三・三
大阪朝日	五、四四一	二二・八	七四七	一・〇	四、六九四	二二・七
東京朝日	三、三七五	一四・一	三五五	〇・七	三、〇二〇	一四・六
東京日日	三、三四一	一四・〇	三三九	〇・四	三、〇〇二	一四・五
報知	二、〇四九	八・六	二八六	〇・四	一、七六三	八・五
國民	一、三五四	五・七	一〇二	〇・七	一、二五二	六・一
東京時事	一、一七一	五・〇	一七二	〇・〇	九九九	四・八
讀賣	四九一	二・〇	一〇一	一・四	三九〇	一・九
大阪時事	三二五	一・四	一〇九	一・〇	二一六	一・〇
中外商業	一九二	〇・八	三六	〇・四	一五六	〇・七
都	一一九	〇・五	三九	〇・四	八〇	〇・四
東京毎夕	一〇四	〇・四	二三	〇・四	八一	〇・四
萬朝	九二	〇・四	一七	〇・七	七五	〇・四
其他	二四三	一・〇	一〇八	三・四	一三五	〇・七
計	二三、八六三	一〇〇	一九二	一〇〇	二〇、六七一	一〇〇

右の表は中央新聞に就き報告せられた團數に基き、之をその大小順に配列して作製せるものであるが、一見して分る通り大阪の毎日、朝日それから東京の朝日、日々の四紙は斷然隔絶せる勢力を以て他の諸新聞紙をリードしてゐる。即ちこの四紙の報告團數の總計は一三、七二三團にのぼり、實に全報告團數の七四、二%を占むる。まさに我が新聞界のビツグ・フオア或はビツグ・ツー(大毎と東日それから東朝と大朝とは各々資本系統を一にするから)とも稱すべきであらう。所謂全國的大新聞としてこの四紙が占むる大勢力は普通一般に承認せらるゝ處であるが、青年團なる特殊の對象につき調査せる結果が、矢張り同樣の事實を實證せるは誠に興味がある。高度に發達せる近代ジヤーナリズムの影響力は恐らく何者をも征服すべく、わが青年團も決してその例外ではない事を示

666
102

してゐる。この點は我々としては今後とも充分に注意せねばならぬ事であらうと信ずる。

それから表に依れば大毎、東日の兩紙（八、九〇七）は朝日兩紙（八、八一六）を稍々凌駕してゐるが、もとよりほんとの事は我々には分らない。次に著るしく目につく事は關西の大毎、朝日の二紙（四五・一%）が遙かに關東の朝日、日々二紙（二八・一%）を凌駕してゐる事である。蓋し東京には朝日、日々以外にも有力なる幾多の新聞があるが、關西では前記兩社を除いては大阪時事位なもので、他は殆んど云ふに足らず、全く兩社の獨占に歸してゐるからであらう。最後に此の四紙の市部と郡部とに於けるこの四紙の報告團數は市部全數の六八・九%を占め、同樣に郡部では七五・一%となり、郡部の方が多い。蓋し地方都市は所謂地方有力新聞の發行地であり、中央四大新聞の威力を以てしても、さう容易に蠶食を許さぬのであるが、郡農村にありては地方版なる掩護射擊に依る四大新聞の陣地占領は近來誠に目覺ましきものがあるからであらう。報知新聞は市部、郡部及び全國その何れに於ても第五位を占めてゐるが、その數字はずつと減少しており、前記四社に僅かに追隨するに止まる。國民が市部に於て左程の讀者を有せず、主として郡部の數を以て全國第六位に在るのは一寸注目せらるる。次の東京時事は前者と大して變りはないが、讀賣以下の諸紙が大分その數を減少せしめてゐるのは注意すべきであらう。

II　中央新聞の分布狀況

次にそれ等の新聞の分布せる範圍を、道府縣數によつて示せば次表の如くである。

	全國	市部	郡部
讀賣	四一（四〇、北、一）	二三（二二、北）	三七（三六、北、一）
大阪毎日	四〇（三八、北、樺）	三四（三三、北）	三七（三五、北、樺）
報知	三六（三四、北、樺）	二九（二八、北）	三三（三一、北、樺）
大阪朝日	三五（三三、北、樺）	三一（三〇、北）	三四（三二、北、樺）
東京日日	三二（三〇、北、樺）	二四（二三、北）	三〇（二八、北、樺）
萬朝	三〇（二九、北、一）	九（九、一）	二六（二五、北、一）
東京朝日	二九（二七、北、樺）	二一（二〇、北）	二九（二七、北、樺）
東京時事	二七（二六、北、一）	二〇（一九、北）	二四（二三、北、一）
國民	二六（二五、北、一）	一八（一七、北）	二五（二四、北、一）
中外商業	二四（二四、一、一）	一四（一四、一）	二〇（二〇、一、一）
都	一九（一九、一、一）	一〇（一〇、一）	一七（一七、一、一）
大阪時事	一七（一七、一、一）	七（七、一）	一六（一六、一、一）
東京毎夕	一四（一四、一、一）	八（八、一）	一三（一三、一、一）

此の表を見て先づ最も吾人の眼を射るものは、讀賣新聞が北海道並びに全國四十府縣を席捲し、斷然高位を占めてゐる事實である。讀賣新聞に就ての報告團數は前出の如く僅かに四九一で、全國第八位に過ぎない。然るに分布區域に於ては斯の如く多數地方を包攬してゐることは、誠に豫想外

666
102

の結果で、我々はその原因の那邊にあるやを知るに苦しむ次第である。之は青年團特有の何らかの原因に依るものであるか？或は然らざるか？何れとも早計に斷定は出來ないのである。大毎は市部郡部各個別的に見れば何れに於ても第一位を占めてゐるが、全國的には讀賣に次いで第二位である同紙は古くから青年團運動には特別の注意を向けてゐた樣であるから、この數は當然なことうなづかれる。報知、大朝、東日の分布區域は三者共略同樣であり、東朝は稍之らに劣る。萬朝が讀賣と同樣に、極めて少い報告團數にも不拘、相當な分布區域を有するのは面白い、尤も之は主として郡部の數字である。時事と國民とは大體に於て同じ樣な狀態にある。中外商業の如き經濟新聞、都の如き或意味の娛樂新聞が何れも相當な地域に亙つて讀まれてゐるのは、注意すべき現象であらう、大阪時事は大阪を中心とする近畿四國地方、東京毎夕は東京及近縣に於てのみ讀まれてゐるのであるから、分布府縣數は割合に少い。

更に右の分布區域の內容を大觀するならば、讀賣、大毎と報知とはまづ全國にあまねく讀まれてゐると云つてもよい。之は非常に注意すべき結果で、恐らく之らの新聞の記事の內容に何らかの青年團員に必要な、或はその趣味に投じた或るものがあるからであらうと信ずる。東西の毎日、朝日の四紙も勿論全國的に廣汎に讀まれてゐるのであるが、この四紙の間には自ら興味ある左の如き傾

向が現はれてゐる。即ち大阪毎日、大阪朝日の兩紙の主力は近畿及其以西、それから東海、北陸、東山に至り關東以北にはあまり及んでゐない。(但し大毎は前記の如く殆んど全國的)之に反して東朝、東日の二紙は關東以北を主要地盤とし、東山、北陸、東海を境界として、それより以西にはあまり勢力がない。而して北陸、東山、東海の三地方はまさに東西の混戰地帶と稱すべく、北陸地方は新潟縣をのぞき主として關西の勢力範圍であり、東北區は岐阜を關西に讓り、他の二縣は關東の勢力下にある。東海では靜岡縣が完全に關東新聞の影響の下にあり、愛知、三重はむしろ大阪新聞の下に立つ。なほこの四社の報告團數の計をとつて見ると、關東の二紙は僅かに六、七一六で、關西の二社合計一一、〇〇七に及ばざる事甚だ遠い。蓋し東京には東朝、東日以外にも相當有力な新聞紙が多數あつて、相互に競爭狀態であるが、大阪に於ては大阪時事をのぞいては他にさして有力なるものなく、全く大朝、大毎の獨占の形勢であり、かく多數の報告團數を擁する結果となるのである。之によつて我々はこの大阪の兩紙が關西に於て如何に卓越せる勢力を保持せるかゞ分る。東京の新聞は比較的全國に亙つて分布してゐるが、その報告團數はおしなべて少い。次に萬朝は前記讀賣などと同樣割合に全國的に讀まれてゐるが、國民、時事は主として關東以北のものである。なほ關西に於ても若干讀まれてゐる。中外、都、毎夕に至つては何れも東海の愛知縣以西に於てはあ

666
102

まり讀まれてゐない。逆に大阪時事は關西が中心で、近畿、北陸、中國、四國に於て購讀されてゐるのである。

二　地方新聞

1　地方新聞の購讀狀況

地方新聞に於ては中央新聞と異なり、その數極めて多く、本調査に現れた數を見ても前記の如く一三六種以上に及び、今その主なるものを左に揭げる。

之に依れば市部では新愛知、名古屋新聞及び福岡日々の三紙が最も多く、之に次ぐものは神戸新聞、神戸又新等である。次に郡部では北海道の北海タイムスと小樽新聞、中京の新愛知と名古屋新聞、九州の福岡日々及び中國地方の中國新聞、中國民報、山陽新報等が著るしい。以上を市、郡合計の全國的結果より見るときは、新愛知と北海タイムスの二紙が斷然他者を切り離して優勢である。此の二紙は地方新聞中の花形としてなまじつかな中央新聞などよりは遙かに立派な全國的大新聞とされてゐるが、青年團に關する本調査に於ても矢張り同樣な結果が現はれてゐるのは面白い。之に繼ぐものは小樽新聞、名古屋新聞及び福岡日々の三紙であるが、之らも地方新聞中の尤なるものとして廣く人に知られてゐる。次には中國地方の三紙（中國新聞、中國民報、山陽新報）がほゞ同樣な勢力で、相伍して登場する。この三紙及び前記の北海タイムス及び小樽新聞の二紙は市部よりも郡部に於ける數字が著るしい。さて以上の八紙を最有力なる地方新聞として假りにその報告團數の

新聞紙名	全國	市部	郡部	新聞紙名	全國	市部	郡部
新愛知	一、二二一	一五一	一、〇七〇	神戸又新	二三一	六三	一六八
北海タイムス	一、一二三	四四	一、〇七九	福島民友	二二七	一〇	二一七
小樽新聞	八九八	二五	八七三	いばらき	二一六	一	二一五
名古屋新聞	六七九	一〇六	五七三	九州日日	一九三	二八	一六五
福岡日日	五八四	九七	四八七	松陽新聞	一九七	—	一九七
中國新聞	四七七	二四	四五三	富山日報	一九三	一一	一八二
中國民報	四三八	二七	四一一	北陸毎日	一九二	一三	一七九
山陽新報	四二五	二五	四〇〇	藝備新報	一八九	七	一八二
九州日日	二九九	四	二九五	豐州新報	一八五	八	一七七
神戸新聞	二八〇	七三	二〇七	秋田魁	一八三	四	一七九
伊勢新聞	二六一	九	二五二	大分新聞	一六八	四	一六四
九州新聞	二五四	—	二五四	岩手日報	一六八	七	一六一
北陸タイムス	二四二	一二	二三〇	京都日日	一六四	五八	一〇六
靜岡新報	二四二	五一	一九一	長崎日日	一五六	二三	一三三
北國新聞	二三八	一四	二二四	山梨日日	一五三	三	一五〇
岐阜日日	二三八	一九	二一九	上毛新聞	一五一	九	一四二
河北新報	二三五	一七	二一八	以下省略			

666
102

總計をとつて見ると、五、八四五となり全地方新聞の約二八パーセントを占むるに過ぎない。即ちこゝでは中央新聞に於けるが如き甚だしき勢力の不均衡は未だ現はれてゐないのである。この點は中央新聞とは大いにその傾向を異にせる處で、こゝに地方新聞特殊の事情が伏在してゐるのではあるまいか。この事は雜誌、單行本などの他の出版物とは全くその傾向相反せるもので、一つの地方分權的な現象と看做され得る。思ふにこの原因たるや全く地方新聞特殊の事情に因るものと謂ふべく、地方新聞がその地方特有の古き傳統關係、政黨關係及び經濟關係と極めて密接に結びついてゐる結果である。要するに之によつて獨り青年團の場合のみならず、一般にその地方特殊の事情と云ふものは何時でも大いに考慮を要することを敎へらるゝのである。

尙ほ地方新聞全體としては既述の如く、市部よりも郡部に於て、より多く讀まれてゐる。(中央新聞はこの逆である)この事は地方新聞が地方の都市を中心として發行せられながら、やはりその主たる地盤は農村に在る事を示してゐるのである。それから集計の都合上特殊新聞の中に入れておいたが、橫濱市の橫濱貿易新聞はむしろ地方新聞の一つと云つてよい。

II　地方新聞の分布狀況

次に地方新聞の分布狀況を述べるに、先づ分布せる範圍を府縣數によつて示せば次の如し。

新聞紙名	全國	市部	郡部
新愛知	一二	一〇	一二
名古屋	一〇	六	一〇
福岡日日	九	八	九
山陽新報	七	三	七
中國民報	七	四	七
愛知新聞	七	三	五
北海タイムス	五	二	五
中國新聞	五	三	五
九州日日	五	三	五
河北新報	五	四	四
關門日日	四	三	四
九州日報	四	三	四
函館毎日	三	一	三
いばらき	三	一	三
松陽新報	三	一	三
關門新聞	三	一	三
北陸タイムス	三	二	二
北國新聞	三	二	二
小樽新聞	二	一	二
はちのへ	二	一	二
八戸毎日	二	一	二

新聞紙名	全國	市部	郡部
關東タイムス	二	一	二
下野新聞	二	一	二
北陸毎日	二	一	二
金澤新報	二	一	二
靜岡新報	二	一	二
名古屋毎日	二	一	二
伊勢新聞	二	一	二
京都日日	二	二	二
京都日出	二	一	二
紀南新聞	二	一	二
因伯時報	二	一	二
山陰新聞	二	一	二
山陰日日	二	一	二
山陽日日	二	一	二
香川新報	二	一	二
四國民報	二	一	二
高知新聞	二	一	二
長崎日日	二	一	二
中津新聞	二	一	二
鹿兒島新聞	二	二	二
鹿兒島朝日	二	一	二

以下省略ス

666
102

此の表を前記中央新聞の分布表と比較對照するならば、兩者の差異が極めて判然と現はれてくる。中央新聞に於て四十餘縣に行き亘る讀賣、大毎は云はずもがな、最低度の東京毎夕(一四府縣)に對してすら、地方新聞の筆頭、新愛知(一二府縣)は之に劣るのである。この事は一面政治の中心たる東京及び經濟的に卓越せる大阪に於て發行せられつゝある新聞紙が如何に全國的傾向を帶びるものであるかを示すと共に、他面地方新聞が如何にその地方の特殊事情と結びついており、それ丈けまたいろ〳〵注意すべき事情の多々存在する事を暗示してゐるのである。さて新愛知は前記報告團數に於ても第一位であつたが、此の分布表に於てもやはり依然トツプを切り、名實共にこの新聞が地方新聞中の第一流たる事を實證してゐる。其の勢力範圍は膝下の東海一圓、北陸一圓、それから東山區では山梨を除いた長野、岐阜及び近畿の奈良、滋賀、京都にまでも及んでゐる。同じ中京の名古屋新聞は報告團數は前者の半分を稍々超過するに過ぎないが分布區域はおよそ前者と同樣である。こゝで一寸附言して置き度い事は政黨關係のことで、一般に前者は政友系で、後者は民政系と稱せられてゐるが、か樣に地方都市には必ず二つ乃至三つの有力新聞があつて、それらは互ひに民政か政友か何れかに屬し、本調査に於ても可なり興味ある事實がうかゞはれる。之を以て地方新聞は地元政黨關係によつて購讀の有無を決定せらるゝの傾向が青年團に於てもやはり看取せらるゝ樣である。が併し之についての調査集計は行はなかつた。次に九州に於ては福岡日々が第一人者で九州一圓及び近縣たる中國の山口、山陰地方へとその羽翼を伸ばしてゐる。右の三紙は片や愛知、片や福岡と何れも所謂一等縣の中心都市に於て發行せられつゝあるものであり、之らの諸都市が、その地方の政治、經濟乃至文化の中心地たるの事實をはつきり示すものであり、面白い事であると思ふ。これは他の諸都市に於ても多かれ少かれ同樣に云はれ得る事である事は云ふまでもない。なほ愛知縣には前記二紙の外に愛知新聞があり、やはり七府縣にまたがり、地方新聞としては分布區域の廣い方である。さきに中央新聞の項下に於て此の地方が東西新聞の混戰地としてすさまじい競爭が行はれてゐる事を指摘しておいたが、この中央新聞の外に更らにか樣に有力な地方新聞が存在するのであるから、この地方の青年團に對する新聞の影響は頗る大きなものと謂はねばならぬ。が併し之はジヤーナリズムと青年團との關係を示す有力な事例であつて、我々は一般に現代ジヤーナリズムが良かれ惡かれあらゆるものを自己の坩堝の中に投げ入れる傾向をみとめざるを得ないが、わが青年團も決してその例外にはあらずと明言してよいと思ふ。この點は本調査の簡單ではあるが重要な結論であつて、これは今後充分に戒心すべき事柄であらうと信ずる。左に既述の三紙以外の主なる地方新聞の分布狀況につきその範圍を摘記して置く。

666
102

山陽新聞　中國一圓(山口を除く)、兵庫、德島、香川。
中國民報　同前。
愛知新聞　東海一圓、岐阜、滋賀、京都、奈良。
北海タイムス　樺太、北海道、青森、新潟、宮城。
中國新聞　中國一圓(鳥取を除く)、愛媛。
九州日々　九州內(佐賀、長崎記載なし)。
河北新報　東北內。
關門日々　島根、山口、福岡、長崎。
九州日報　九州內。

三　特殊新聞

特殊新聞の總數は既述の如く凡てで一九一紙を算し、報告せられた團數は市部二三〇、郡部一、〇五一、全國合計一、二八一團となつてゐる。之は全報告團數四五、四八九の僅かに二・八%を占むるに過ぎないから特殊新聞への青年團の關心は全體としては極めて稀薄なものと謂ふべきである併し特殊新聞の本質を考へれば之は當然の事であり、且又個々の新聞紙をとつて考える時は右の一般的結言は必ずしもあてはまらぬ。先づ左に報告團數の大小に依りて配列せるものと(A表)、各新聞紙の分布狀態(B表)とを掲ぐれば左の如くである。

A　表

新聞紙名	全國	市部	郡部
日本青年新聞	四三九	六四	三七五
横濱貿易新聞	一四五	四二	一〇三
禁酒新聞	一〇六	九	九七
人類愛善新聞	四六	二	四四
勞力	三一	一一	二〇
村の新聞	二七	—	二七
共榮	二〇	—	二〇
青年新報	一九	一八	一
神戸青年	一四	一四	—
農民	一三	—	一三
つはもの	一三	一三	一〇
奉公新聞	一三	一	一二

666
102

B 表

新聞紙名	分布區域	一	二	三	四	五	六	七	八	九	一〇	一一	一二
一、日本青年新聞	北、樺、四二府縣（愛媛、佐賀、宮崎、鹿兒島ナシ）												
二、禁酒新聞	北、二五縣												
三、人類愛善新聞	北、一五縣												
四、勞力	北、八縣												
五、つはもの	北、七縣												
六、農民	七縣												
七、日本新聞	六縣												
〃、英文每日	北、四縣												
八、工業新聞													
八、天業民報	北、四縣												
〃融和時報	五縣												
九、青年タイムス	北、三縣												
〃、商業新報	四縣												
一〇、横濱貿易新聞	三縣（神奈川、東京、富山）												
〃、農村	北、二縣（山形、鹿兒島）												
〃、大衆新聞	三縣												
二、青年新報	北、一府（大阪）												
〃、中央商業	二縣（埼玉、千葉）												
農村の新聞	一縣（島根）												
共榮	北海道												
神戸青年	兵庫縣神戸市												
奉公新聞	一縣（大分）												
太平樂	一府（京都）												
北海青年	北海道												
四日市商業	一縣（三重）												
和泉實業	一府（大阪）												
岩見澤	北海道												
雨毛織物	一縣（群馬）												
計		一、二八一		二三〇		一、〇五一							

右の表に於て際立つて目に映るのはわが日本青年新聞が名實共に首位を占めてゐることである。この新聞の全國報告團數四三九は恰も中央新聞、讀賣の四九一と略々、同等であり、その分布地域も讀賣のそれと全く照應して殆んど全國を席捲し、まさに全國的新聞としての壯觀を呈してゐるのは誠に心强い次第である。高度に發達せるジャーナリズムの渦中にあつて、よく讀賣と互格の地位を持するはむしろ欣ぶべき現象である。次の横濱貿易新聞は所謂トレード・ペーパーとして特殊新聞の一つには相違なきも、實はこの新聞は東京中外商業と同樣に、一般新聞の性質を多分に持つてゐるもので、一般地方新聞中に計上すべきであつたのであるが、集計の途上妄りに改變を許さぬので、もとのままにして置いた次第である。日本國民禁酒同盟の機關紙禁酒新聞は第三位を占めてゐるが、其分布區域は相當廣汎全國的であり、第二位を占めてゐる。大本教の人類愛善新聞は報告團數は前三者よりは大分距つてゐるが、分布地域はか樣な宗教新聞としては可なり廣いのではないか

666
102

と考へられる。

次にこの一九一紙の特殊新聞をその主要内容に從つて若干の項目の下に分類するときは左の結果を得る。

分類別	紙數	報告團數
經濟産業	八〇	三二九
社會	三三	一〇七
青年團	二九	五四九
文藝	二七	七一
宗教教化	一六	二〇九
其他	六	一六
計	一九一	一、二八一

青年團關係は新聞紙の數は少いが、報告團數は斷然多い。この中に含まれるものは日本青年新聞を主なるものとして、他は凡て各地方の青年團の機關紙である。なほ軍事關係の六紙(報告團數二四)も便宜上この中に入れておいた。經濟商業關係は新聞紙數に於て斷然他を壓し、報告團數も仲々多い。之は各地の青年團員とその經濟活動との關聯を示す數字として面白いものである。宗教教化關係も新聞紙數の割合には報告團數が多い、人類愛善、禁酒、天業民報等々を包含する。其他の中にはジヤパン・タイムス、英文毎日それから滿洲日報及朝鮮新聞等が含まれてゐる。

四　都市に於ける狀況

茲では特に市部の報告團數丈けにつき、より詳細に考察して見よう。

I　都市大小別より見たる全體的結果

市部を人口の大小別に依り五〇萬以上の都市、一〇—五〇萬の都市、五萬—一〇萬の都市、五萬未滿の都市の四つに分類して、中央新聞、地方新聞、特殊新聞の報告團數を比較すれば左表の如くである。

都市大小別 / 分類別		五〇萬以上		一〇—五〇萬		五—一〇萬		五萬未滿		計	
		實數	%	實數	%	實數	%	實數	%	實數	%
集計團數		四八四	—	三三一	—	二九四	—	二〇三	—	一、三一二	—
中央新聞		一、三〇六 (二・七八)	四〇・九	六九八 (二・一〇)	二一・九	六八五 (二・三三)	二一・五	三〇三 (二・四九)	一五・七	三、一九三 (二、四三)	一〇〇
地方新聞		四二六 (〇・八八)	三一・一	五四三 (一、六四)	二八・二	六一七 (二・一〇)	三一・九	三四三 (一・四六)	一七・八	一、九二九 (一・四七)	一〇〇
特殊新聞		一五八 (〇・三二)	六八・七	四〇 (〇・一二)	一七・四	二〇 (〇・〇六)	八・七	一二 (〇・〇五)	五・二	二三〇 (〇・一七)	一〇〇
計		一、八九〇 (三・九〇)	三五・三	一、二八一 (三・八七)	二三・九	一、三三三 (四・四九)	二四・七	八五八 (四・四八)	一六・一	五、三五一 (四・〇八)	一〇〇

備考　(　)内は集計團數と報告延團數との夫々の割合を示す。

先づ中央新聞の五〇萬以上の都市に於ける報告團數が極めて大きく、中央新聞全體の實に四〇・九%を占むる(集計團數との比も他の何れの群よりも勝つてゐる。)之は東京、大阪の二大都市を包含

666
102

する六大都市としては蓋し當然な結果であらう。五萬未滿は集計團數少き爲報告團數は少いが中央新聞の影響は相當大であると見ることが出來る(集計團數との比二・四九)。而してこの群の地方新聞の數が非常に少いことと併せ考へて、この群は中央新聞の侵蝕が最も甚だしいのではあるまいか。

次に地方新聞は六大都市に於て最も劣勢で、中央新聞の優勢なるに對してまさに對蹠的現象を示してゐる。蓋し當然な結果であらう。一〇—五〇萬、五—一〇萬の都市間には大差が無い、之は中央新聞の場合も同樣である。蓋し之らの兩群は殆んど凡て地方新聞の發行所在地であり、恐らくここでは所謂中央新聞、地方新聞の併續が行はれてゐるのであらう。

全國都市の合計に於ては中央新聞は遙かに地方新聞を凌駕し、所謂中央新聞による地方新聞の蠶食の過程を如實に表現してゐる。それから特殊新聞が報告團數に於ても集計團數との割合に於ても都市の大小に正比例してその勢力を消長せしめてゐるのは興味ある結果と謂はねばならぬ。

II 都市大小別より見たる中央新聞內部の關係

次に揭ぐる表は中央新聞のみの市部に於ける數字であるが、之に依つて中央新聞各紙の狀勢を覗ふことが出來る。

報告團數は五〇萬以上の都市が最も著るしく、以下大小順に從ひその%が下降する。個々の新聞紙をとつて見ても五〇萬以上に於けるものが何れも例外なく首位を占めてゐる。特に大阪時事、萬朝、每夕及び讀賣の四紙はこの群に於て自己の分布數の過半を占めてゐるのである。大每、大朝も

新聞紙名＼都市大小別	五〇萬以上		一〇—五〇萬		五—一〇萬		五萬未滿		計	
	實數	%	實數	%	實數	%	實數	%	實數	%
大阪每日	三三〇	四三・五	一六八	二二・二	一四八	一九・五	一二三	一四・八	七五八	一〇〇
大阪朝日	三三〇	四四・二	一六九	二三・六	一四〇	一八・七	一〇八	一四・五	七四七	一〇〇
東京朝日	一〇一	二八・一五	九四	二六・五	九七	二七・三	六三	一七・七	三五五	一〇〇
東京日日	九九	二九・二	八二	二四・二	九四	二七・七	六四	一八・九	三三九	一〇〇
報知	九六	三三・五	七〇	二四・五	七六	二六・六	四四	一五・四	二八六	一〇〇
東京時事	五六	三二・五	四四	二五・六	三九	二三・七	三三	一九・二	一七二	一〇〇
大阪時事	八五	七七・九	五	四・六	一〇	九・二	九	八・三	一〇九	一〇〇
國民	四一	四〇・二	一九	一八・六	二四	二三・五	一八	一七・七	一〇二	一〇〇
讀賣	五三	五一・五	一七	一六・八	一九	一八・八	一三	一二・九	一〇二	一〇〇
都	一五	三八・五	四	一〇・三	一〇	二五・六	一〇	二五・六	三九	一〇〇
中外商業	一六	四四・五	七	一九・四	五	一三・九	八	二二・二	三六	一〇〇
東京每夕	一二	五二・二	二	八・七	三	一三・〇	六	二六・一	二三	一〇〇
萬朝	一二	六四・七	一	五・九	一	五・九	四	二三・五	一七	一〇〇
其他	六二	五七・四	一六	一四・八	一九	一七・六	一二	一〇・二	一〇八	一〇〇
計	一、三〇六	四〇・九	六九八	二一・九	六八五	二一・四	五〇三	一五・八	三、一九二	一〇〇

666
102

ほぼ半分に近い。何れにしても中央新聞の大都市集中の傾向は極めて著るしい。なほ都、中外商業、毎夕、萬朝の四紙の第二位が何れも五萬未滿の都市にあるのは可なり特徴的な現象と謂はざるを得ない。其他の新聞は凡て五萬未滿に於て大阪時事を除き第四位に位するのである。最後に各都市群内部に於て個々の新聞がどの様に配分されてゐるかと云へば、矢張り大毎、大朝が最有力で、之に次いでは東朝、東日が多いが、その數は前二者とは大分距離があるのである。

講義錄

概說

一、講義錄、講習錄、講座等は一定期間繼續的に發行せらるる點、或る事柄に就て體系的な知識を與へる點等々、他の一般圖書とは大分趣きを異にしてゐる。從つて之らの書籍を繙讀せらるる青年團員諸君の態度、傾向等も自ら他の讀物に於けるとは異つてくるわけである。本調査は右の事情を明らかにせんが爲になされたものである。

二、所謂講義錄的なものは凡て他の一般圖書と分離してこゝに包括せしめた。大日本聯合青年團に於て毎月發行せられ、非常に好評を博してゐる「青年カード」も右の意味に於て本調査の中に集計されてゐる。而して左記の表に依りても明らかな如く、大部分は講義錄であつて、其他のものは少い。講義錄と講習錄とはその性質殆んど同樣で、講座は多少意味を異にするが、要するに三者間の差はあまり重要では無いから、大體に於て之らの異同を問はないで記述する。

三、次に本調査の集計團數は全國合計八、九八八團(內、市部七八〇、郡部八、二〇八)で、圖書に次いでその數が少い。報告延團數は全國合計一七、八五七團で其の內譯は左の通りである。

	全國	市部	郡部
講義錄	一四、一五二	五二七	一三、六二五
講習錄	二七四	一一	二六二
講座	五六〇	一五	五四五
其他	二、八七一	九五一	一、九二〇
計	一七、八五七	一、五〇四	一六、三五三

注目すべきは市部の報告團數が非常に少いことで、之は講義錄類への關心が主に農村にのみある事を示すものであらう。「其他」とあるのは右三者以外の名稱を冠せられたものであるが、元よりその內容は講義錄的なものである。

666
102

四、考察の便宜の爲に、講義錄の內容性質に從ひ、之を下記の項目に分類する。即ち中學、青年（補習を含む）、農業及水產、商業實業、文藝、官吏養成受驗（師範を含む）、大學、社會（兵事を含む）、工學、趣味及び其他の十一である。かくの如く講義錄の內容は極めて多岐多方面に亘つてゐる。そして後に述べる通りその程度にも、種々高低があるのである。尙ほこの調査に於ては間々講義錄的でないと思はれるものも混入してゐるが、之は主として報告の不備に基づくもので、今更訂正の仕樣もないのでその儘にして置いたわけである。

一、全國的結果

前述の分類別並びに個々の書名別に依つて先づ全國的な傾向を考へて見よう。

I 分類別に依る觀察

分類別に依る講義錄、講習錄、講座、其他の全國的結果は左表の如くである。

此の表に於て明瞭なる如く中學講義錄が壓倒的で大半を占めてゐる。此の結果はイ、講義錄なるものに對する青年團員の基本的な方向を示してゐる。ロ、それから一般的に（農村）青年の知識の程度及び傾向を示してゐる。ハ、更らに青年團員の經濟的地位並に社會的欲望の一端をも暗示してゐるのである。蓋し叙上の點は單なる一般圖書の讀物調査では窺ひ得ない處であらうと信ずる。身

分類別 / 種別	講義錄	講習錄	講座	其他	計 實數	計 %
中學	八、四八九	六	三二	一	八、五二七	四七・七
青年	三八	五	一四一	二、一一四	二、二九八	一二・九
農業及水產	一、四六三	三七	二八	七	一、五三五	八・六
商業實業	九九六	二〇八	四	一	一、二〇九	六・八
文藝	四七四	三	四〇	三	五一七	二・九
官吏養成	五一九	三	一一	一	五三三	三・〇
大學	四五六	一	一	一	四五七	二・六
社會	三八九	二	一六〇	一	五五一	三・一
工學	二九六	一	三	一	三〇九	一・七
趣味	一一〇	七	九	二	一一八	〇・七
其他	九二二	一	一二八	二	一、〇五九	五・九
五册以下	一	一	六	一	七四四	四・一
計	一四、一五二	二七四	五六〇	二、八七一	一七、八五七	一〇〇

は田野に起居し、比較的不遇な地位にありながら、尙ほ且つより以上の知識を獲得して行かうと云ふ青年の素朴なそして眞面目な好學心の現はれとして、この數字の示す教訓は實に深い。主として農村青年（都市三九八、郡部八、〇九一）のこの純眞な欲望を一日も早く何とか滿足せしめ度いものである。さて第二位は「青年」に關するものであるが、之は大部分青年カードの數字（二、一一四）で

666
102

ある。之を以て青年カードが團員諸君に依つて如何に愛好せられてゐるかゞ實證せられる。この種のものゝ尚續々と發行せられん事を望むや切である。次の農業及水産それから商業實業も前者に比しては少ないがなほ相當大きな數字である。社會以下は格段とその桁が下つてゐる。がそれと共に講義錄の內容は非常に特殊化してくる。之を以て見ても前記中學講義錄の場合が講義錄に對する青年の基本的な傾向であることが看取される。即ち程度は中等、內容は一般的知識之である。數の少い特殊的なものゝ中にありても、前記農業及水產並びに商業實業はかなりの數を占めてゐるが、要するに之は自己の實生活に必要な知識即ち經濟的知識を求めたものであつて、注意すべき現象である。そして既述の雜誌、圖書に於て斷然リードしてゐた文藝などを遙かに凌駕してゐるのは誠に愉快である。講義錄をとつて毎月丹念に讀まうと云ふ青年の堅實な氣風がこゝに現はれてゐるのである。工學類も之と同樣なのであるが、か樣な自然科學的なものになるとやはりその數が少いのは遺憾である。官吏養成受驗は全く郡部ばかりで、市部の集計に於ては少しも現はれてゐない。蓋し農村或は農業を離れて他に一定の職業を求めんとする者の準備的な勉強の爲であらう。社會、文藝大學、趣味の四者は右に比してはより程度の高い又は生活の大地を離れた或る意味の有閑數字である。なほ假りに文藝趣味と社會大學の各々の結果を合算すれば前者は三・六%、後者は五・%〇で矢張り文藝物が少い。之は前者の如き講義錄の少いせいもあるが、一面講義錄を讀む程の青年達の質實なる讀書傾向を現はすものとして興が深い。

II　書名別に依る觀察

次に何と云ふ書名のものが多く普及してゐるか、書名別に見れば次表の如くである。

	書名	別	報告團數		書名	別	報告團數		書名	別	報告團數
一、	中	學	四、〇一二	一六、	農業	大學	一七九	三二、	養	鷄	五四
二、	青年カード		二、一一四	一七、	大日本中學		一五六	三三、	建	築	五一
三、	早稻田中學		一、七一八	一八、	早稻田商業		一五二	三四、	井上英語		五〇
四、	大日本國民中學會		七九九	一九、	國民中學會		一三九	三五、	法	律	五〇
五、	國民中學		七五三	二〇、	青年		一三八	三六、	早稻田實業		四三
六、	農業		四八四	二一、	模範中學		一三〇	三七、	早稻田法律		四二
七、	早稻田		四三五	二二、	農學		一二八	三八、	社會大學		四二
八、	大日本國民中學		四一二	二三、	英語		一二七	三九、	工業		四〇
九、	實業		四一一	二四、	帝國中學		一〇四	四〇、	日本中學		三八
一〇、	早稻田大學		三九八	二五、	早稻田文學		九一	四一、	電氣		三七
一一、	商業		二九三	二六、	鐵道		八二	四二、	訓練		三六
一二、	普通文官養成		二七六	二七、	正則中學		七四	四三、	自働車		二九
一三、	大日本國民		二六三	二八、	公民		七三	四四、	普	樂	二八
一四、	昭和中學		二四九	二九、	大日本中學會		七一				
一五、	實業		二〇二	三〇、	朝日常識		六八				
				三一、	文學		六七				

666
102

單に「中學」と記せしものが、四、〇一二あつて最高位を占めてゐる。この名稱は不明であるが中學講義錄たる事には間違がない。それから名稱はついてゐるが、報告不完全の爲に左表の通り判然としないものが可なりある。之を適當に按配して得たる結果に依れば、大日本國民中學會講義錄一二・三四%、早稻田中學講義錄一一・三三%で、何れも中學講義錄の中では勿論、全講義錄の中でも非常に高度な普及率を示してゐるのである。青年カードは一一・八三%で以上の次に位してゐるが之亦相當大きな數字を示してゐる。農業講義錄、實業講義錄、早稻田大學講義錄、商業講義錄及び普通文官養成講義錄等々が、以上に繼いでゐるが、その%は遙かに前者に及ばぬのである。而して之より以下に至つてはその數は殆んど數へるばかりで、而も尙ほその間昭和中學、模範中學、帝國中學、正則中學等、可なり多數の中學講義錄が介在してゐるのであるから、如何に一般的な中學講義錄が壓倒的であるかゞ察知される。

III、各分類別內容書目

各分類別內に一體どんな書籍が含まれてゐるか、之を表式的に示せば左の通りである。(左記中1は講義錄、2は講習錄、3は講座、4は其他を表す。)

中學

1 中學四〇一二、早稻田中學一七一八、大日本國民中學會七九九、大日本國民中學七五三、國民中學四一二、大日本國民二六三、昭和中學二四九、大日本中學一五六、國民中學會一三九、模範中學一三〇、帝國中學一〇四、正則中學七四、大日本中學會七一、日本中學三八、帝國中學會二四、速成中學二二、通信中學一八、文化中學、文華中學、帝國教育中學、昭和中學會、日本中學會。

2 中學、國民中學、中等。

3 中學二二、帝國教育中學、中等。

青年及補習

1 青年四、中堅青年、青年會役員、青年教育、中堅青年養成、縣青年教本。

2 青年二、國民教育青年、大日本青年。

3、青年一三八、青年團、青年團修養錄。

4 青年カード二一一四。

補習——補習一六、補習教育四、國民補習、大日本補習、國民補習會、補習學、高等小學。(計二八)

農業及水產

1 農業四八四、農業大學一七九、農學一二八、養鷄五四、肥料二〇、農業實習一九、甲種農業一八、農大一七、蠶業一七、農作物改良、農事、甲種農學、副業、園藝、肥料學。

2 農業二五、肥料學、農事。

3 農業一七、蠶業、園藝。

4 農業實習錄二。

666
102

水產——水產八、通信水產、帝國水產、漁業研究錄。（計一四）

商業實業

1 實業四一一、商業二九三、早稻田商業一五二、早稻田實業四三、珠算一三、實科中學一二、簿記九、帝國實業、實業實科中學。

2 實業二〇二、帝國實業、商業。

3 實業、商業、中等實業青年。

4 實業補習錄。

文藝及趣味

1 英語一二七、早稻田文學九一、文學六七、井上英語五〇、音樂二八、習字二一、書道二〇、ローマ字一六、英語通信一四、漢文九、手紙文八、正則英語五、研究社英語五。

2 手紙習字、文章、文藝。

3 英語通信一七、英語六、エスペラント六。

4 ペン字教習。

官吏養成受驗

1 普通文官養成二七六、鐵道員養成八二、巡査養成二二、教員養成一〇、遞信官吏養成五。

2 鐵道二、判任官。

3 教育受驗三、帝國教育會。

師範——師範一二、其他（計二〇）

大學

1 早稻田四三五、早稻田大學三九八、社會大學四二、大學三二。

社會

1 法律五〇、早稻田法律四二、政治經濟三四、早稻田政治經濟二五、法制二〇。

2 公民七三、朝日常識六八、國民七、政治六、公民教育、自治、政治教育。兵事——訓練三六、青年訓練一五（計一〇三）

工學

1 建築五一、工業四〇、電氣三七、自動車二九、電氣學一八、數學一四、早稻田電氣工學一一、飛行機八、工學六。

「中學」講義錄の種類の多いのには一驚を喫するが、早稻田中學講義錄と大日本國民中學講義錄とが卓越してゐる。それから「青年」では前述の如く青年カードが第一位で、其他のものは至つて少數である。「農業」の中には農業大學講義錄等々、可なり程度の高いものゝ含まれてゐる點は、次の「商業實業」の中に珠算、簿記等極めて卑近なものが含まれてゐるのと面白い對照を爲してゐるのである。「文藝」の中には英語、エスペラント、ローマ字等外國語關係が大變多い。青年の知識欲の或る型を現はしてゐるものであらう。「官吏養成受驗」の中では普通文官養成講義錄、鐵道員養成講義錄が多い。なほ師範及び教員方面もこの中に含まれてゐる。「大學」では早稻田大學講

666
102

義錄が多く、「社會」では法律、經濟何れも相半ばしてゐる。「其他」の中の朝日常識講座は實はこの部門の中に入れて考へるべきである。「工學」では建築と土木、「趣味」では音樂と書道とが多いのは興味がある。

最後に講義錄に含まるゝ書目が最も一般的で、講習錄は稍々特殊化し、講座に至つては可なり特殊化してゐる様である。なほ前述の如くこの調査の中には講義錄と思はれない様なものが間々介在してゐるが、之は報告の不備で、今更如何とも爲し難いのである。（終）

昭和九年一月十一日印刷
昭和九年一月十六日發行
（推薦圖書目錄）
東京市四谷區霞丘十一
大日本聯合青年團
振替東京六〇七七八

666
102

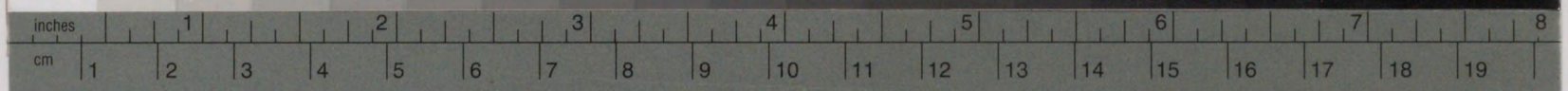
666
102

Kodak Gray Scale

C Y M

© Kodak, 2007 TM: Kodak

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19



Kodak Color Control Patches

© Kodak, 2007 TM: Kodak

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black